国語科における

「教えて考えさせる授業」

―読み方のコツを重視した平成28年度袋井市立高南小学校の実践―

植阪友理・高南小職員（編著）

はじめに

本書は、平成 28 年度に袋井市立高南小学校において行われた国語科に関する実践的研究の一部を紹介するものです。

近年、世界的な動向として、学校では学問の基礎を学ばせるだけでなく、社会で学び続けるための資質・能力を身に付けさせるという考え方が広まりつつあります。「２１世紀型スキル」、「キー・コンピテンシー」、「資質・能力の育成」といったキーワードは、いずれもこうした学力観の変化を示しています。その一方で、こうした発想に基づくカリキュラムをどのように実現していくのか、また、こうした学力・学習力の指導をどのように行っていくべきなのかについては、いまだ模索段階にあると言えるでしょう。「教えて考えさせる授業」はこうした状況の中で、教科の学習を通じて、自立した学習者に求められる発想や勉強法についても合わせて指導することを目指す新たな指導法です。心理学において長年対立したものと捉えられてきた受容学習と発見学習を新たな形で統合した画期的な指導法でもあります（詳しくは、市川伸一・植阪友理（編著）『教えて考えさせる授業　小学校―深い学びとメタ認知を促す授業プラン』（2016 年、図書文化）や市川伸一『「教えて考えさせる授業」を創る―基礎基本の定着・深化・活用を促す「習得型」授業設計―』（2008 年、図書文化）などを参照してください）。高南小学校では、平成 26 年度は算数科を中心に「教えて考えさせる授業」に取り組み、平成 27 年度、28 年度に、国語科を中心に学校をあげて研究に取り組みました。特に平成 28 年度の実践では、「読み方のコツ」を重視した実践を全学年に渡って実施してきました。本書はその成果を紹介するものです。

本書の概要は、以下の通りです。前半は指導案集です。１、３、４、５、６年の５学年分が収録されています。略案もありますが、冒頭に、簡単な見どころや実施ごとの課題などを植阪のほうで簡単にまとめ、報告させていただいています。この内容については、実践終了後に学校現場の先生方と植阪が共同で議論を行い、それを植阪がまとめたものです。

後半は、１、２学期の実践のプレゼンテーション集です。公開研究授業として行った授業のみならず、日々の授業実践においてどのような工夫を行い、その成果と課題はどのようであったのかも紹介されています。

この学校の大きな特徴は、なによりも、研究の熱心さと実践の日常化が挙げられます。指導案やプレゼンテーションを見ていただいてもわかるように、公開研究授業だけを軸に研究を進めるのではなく、個々の先生方が学年団と先生方と協力しながら、毎学期、高い意識を持ちながら実践しています。それがプレゼンテーション集にもよく表れていると思います。私たち東京大学、市川伸一研究室のメンバーは「教えて考えさせる授業」を「普段着の授業」と位置付けておりますので、こうした取り組みは何よりもうれしいことでした。

また、この学校のもう一つの特徴として、チャレンジ精神が挙げられます。「教えて考えさせる授業」は、各地で実践されるようになり、多くの成果をあ

げつつありますが、それでも国語の実践は難しいということをよく聞きます。こうした中、今年度は昨年度の国語の実践を踏まえて、「読み方のコツ」と言う独自のテーマを立て、これを子ども達が意識化できるような授業実践を各学年で様々に工夫しています。この中で、「教えて考えさせる授業」が難しいとされる文学作品にも果敢にチャンレジし、提案を行っています。どの指導案にも、様々な観点から工夫が込められていて、提案性の高いものとなっています。本書が、国語科の「教えて考えさせる授業」に取り組もうとする様々な学校で利用され、実践的研究の活性化につながれば、この上ない幸せです。

とはいえ、「教えて考えさせる授業」の国語科研究はまだまだ始まったばかりです。御高覧いただいた先生方の御意見をいただき、実践を深めていきたいと思っています。ぜひ忌憚のない御意見をいただけますよう、お願い申し上げます。

最後に、本書の発行および編集にあたっては、「ガバナンス改革と教育の質保証に関する理論的実証的研究　（課題番号：26245075）」（代表、東京大学教育学研究科　大桃敏行）および「『教えて考えさせる授業の効果検討―学力差の克服と学習方略の獲得に着目して―（課題番号：15K13126）』（代表、群馬大学教育学研究科　深谷達史）の支援をいただきました。ここに記して感謝申し上げます。

平成 29 年 3 月吉日

編者代表
東京大学大学院教育学研究科　助教　植阪友理

目次

■はじめに

■第１部　指導案集

６年生指導案
作品の世界を深く読み味わおう「やまなし」「イーハトーヴの夢」
…… 3
５年生指導案
本は友達「広がる、つながる、わたしたちの読書　千年の釘にいどむ」
…… 7
４年生指導案
(1)物語を紹介しよう「一つの花」
…… 10
(2)読んで考えたことを話し合おう「ごんぎつね」
…… 14
３年生指導案
読んで感じたことを発表しよう「もうすぐ雨に」…… 17

１年生指導案
くらべてよもう「じどう車くらべ」～のりものブックをつくろう～
…… 24

■第２部　プレゼンテーション資料集

６年生 …… 33
５年生 …… 39
４年生 …… 45
３年生 …… 59
２年生 …… 68
１年生 …… 73

■研究メンバー …… 78

第1部　指導案集

6年生「やまなし」「イーハトーヴの夢」
単元：作品の世界を深く読み味わおう

■この指導案の見所

本単元では、「やまなし」を取り上げる。「やまなし」の５月と１２月の２つのシーンを深く理解する上で、賢治の理想とした世界や、それとは異なる明治時代の現実の世界を理解することが有効であろう。例えば、「１２月の幻灯（キーワードはやまなし）」は賢治が理想とした、土からの恵みを享受し、ささやかでも安心と喜びに満ちた世界という世界観を表しているということも考えられる。一方で「５月の幻灯（キーワードはかわせみ）」はきらきらと一見美しく見えるものの、そこに生きるカニ達はかわせみのように上から突然やってくるものに搾取され、怯えて暮らしている。これは、明治の富国強兵時代の国家と民衆の関係を表現しているとも考えることもできる。これらは１つの解釈に過ぎないが、本単元において「やまなし」とともに収録されている「イーハトーヴの夢」はこうした賢治の世界観を理解するために用意されているものと考えられる。

従来の単元構成では、「イーハトーヴの夢」を読みながら、子どもたちが自発的にこうした世界観にまで深く思いを馳せながら作品を読むことが期待されていることが多いのではなかったのではないかと考える。しかし、現実にはこうしたことはなかなか難しく、多くの子どもは「クラムボンはかぷかぷわらったよ。」といった表現に過度に引き付けられたり、きらきらした光が入る５月の様子を表面的な理解だけで素敵な世界と捉えてしまうことが多く発生していたと思われる。さらにいえば、宮沢賢治の他の作品の並行も多くの学校で行われているが、せっかく並行読みをしても、世界観にまで踏み込んで十分には捉えられていないので、共通する世界観を感じ取ることは難しかったのではないかと思われる。

こうした問題意識を解決するための指導上の工夫として、今回の単元構成では、賢治の世界観（つまり、作品のモチーフ）をかなり明示的に学び、それを使いながら読み取ることとした。また、社会などの授業とも連携し、そのあたりを関連付けて考えられるようにする。さらに、並行読みした作品の中にも、賢治の世界観が読み取れるものはないかを考えてもらい、モチーフを知ることで作品が深く読めるという感覚をもってもらうことを目指す。これが単元全体を通じた工夫である。指導案にあげた具体的な授業では、冒頭で、これまでに学習してきたこととも整理し、５月と１２月が賢治の理想／現実の世界観と対応しているという読み方を共有する。その上で、改めて「なぜやまなしというタイトルにしたのかを考える」という課題を理解深化課題として設けた。授業の最後に共有した子どもたちの発表の中には、以下のような図を作成したグループも見られた（図１）。

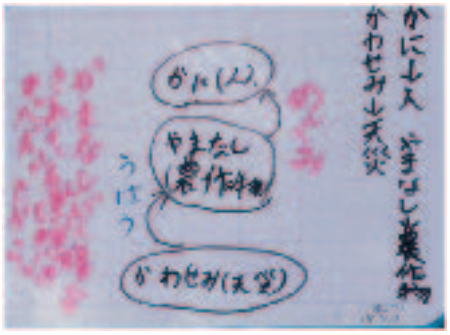


図１　理解深化課題における子どもの発表資料の一例

このグループは、１２月が賢治にとっての理想の世界を表現していることを捉えるのみならず、カニにとってやまなしは農作物であり、大地のめぐみであることまでを理解し、だからこそタイトルにやまなしが選ばれたのだという考え方を発表してくれた。これは深い理解と言えるだろう。なお、この授業の単元の冒頭の初読の感想では、５月をむしろ素敵な世界として表現した子どもが半分程度見られた。つまり、児童だけでこれだけの世界観を読み取れたわけではなく、授業の中で深まっていったのだと考えらえる。児童がこうした深い理解に至った前提として、授業の中の工夫として賢治の世界観やモチーフを十分に共有していたことが挙げられるのではないかと考えられた。

■実際の授業を行った上での課題

授業後の検討会では、様々な論点が挙げられたが、ここでは１つを紹介する。この授業は、昨年度の同単元の実践を踏まえて行われている。その授業においても、賢治の世界観と５月と１２月のモチーフについては共有することを目指したが、今回ほどは十分に児童と共有することができなかった。この結果、「なぜやまなしというタイトルになったのか」という問いに対して、多くの児童が戸惑うことになった。一方、今回の授業では、多くの児童がそのモチーフを理解していた。この結果、タイトルの理解についても、昨年度とはうって変わり、比較的容易に理解されることとなった。この点は大いなる改善である。一方で、一部の子どもは、上述したようなやまなしをめぐみとして捉えるという深い理解にまで至ったが、子どもによっては、「１２月は賢治の理想の世界だから、やまなしというタイトルにした」という程度の理解で止まってしまった子どもも見られた。多くの子どもに、より深いレベルにまで到達してもらうためには、「なぜやまなしというタイトルにしたのか」に加えて、もし１２月が賢治の理想の世界と考えるならば、様々な１２月の幻灯のものの中でなぜやまなしをあえてタイトルとしたのか。なぜ『夜のカニ』など、１２月に出てくる他のものではダメだったのか」を考えさせるとよかったのではないかというアイディアも出された。１２月の幻灯ということに限れば、「夜のカニ」というタイトル案もあり得たわけである。しかし、あえて「やまなし」とした理由を考える中で、大地の恵みを重視する賢治ならではの世界観が反映されているということにより多くの子どもが気付く可能性があったというわけである。

ただし、この単元の最後の並行読みでは、多くの児童が、やまなしでのモチーフの理解を踏まえたコメントを寄せている。例えば「オツベルと象」では、「オツベルに働かされている象が明治時代の弱いものの感じで、オツベルが強いものの感じだけど、最後は弱いものが集まって強いものへ戦いに挑むことを賢治が考えたのかと思いました。／賢治は読者に、弱いものが強いものにしはいされていても、弱いものが集まれば強いものを倒せるというメッセージが込められているように思いました。」と記述している。また、「ツェねずみ」では「ツェねずみが、やまなしと同じで、なにか天災などを表していて、イタチや柱、ちりとり、バケツは農作物や農民を表していると僕は思った。ねずみとりは、神様で天災をとめると言うことだと思いました。／農民やのう作物が天災にやられないように思いをこめてこの本を書いたと思う」と記載していた。深い理解とは多層的なものであり、１つの授業だけでなく、単元全体として達成されていくことでもあることが良く分かる。上記の案がなかったとしても、児童は中長期的に理解を深めていったものだったものと思われるが、１つの授業の代替案としては、こうした理解深化課題もあってもよいのではないかと考えている。

（文責：植阪友理）

第６学年２組　国語科学習指導案

指導者　　太田　幸恵

１　単元名　　作品の世界を深く読み味わおう　「やまなし」「イーハトーヴの夢」

２　本時の活動（７／９）

（１）目標

「５月」と「１２月」の谷川の情景や、「イーハトーヴの夢」の中の世界観から賢治の生き方や考え方を読み取ることを通して「やまなし」という題名にした意味を考えることができる。（読むこと）

（２）本時のおさえ

【教えること】「５月」と「１２月」の世界観（モチーフ）

【考えさせること】　題名をなぜ「やまなし」にしたのか。

（３）準備物

教師…「５月」「１２月」の板書記録（対比表）

（４）本時の展開

		学習活動　・児童のあらわれ	○留意点・支援☆困難度査定　評価
授業前	予習	○前日に教科書「イーハトーヴの夢」「やまなし」を読んでおく。	○分からないところに下線をひかせておく。
教える	教師からの説明	１　めあての確認をする。 ㋮　賢治はなぜ「やまなし」という題名にしたのか、当時の時代背景や賢治の考え方から考えよう。 ○前時までに学習した「５月」と「１２月」のモチーフを押さえる。 ・「５月」は日光で明るいけど　　**怖い・死** きらきらしているけど、　　↓ 川底のかにはぶるぶる ・「１２月」は月光で暗いけど　**酒・いいにおい** 川の水は冷たいけど　　↓ 川底のかにはにこにこ	○時代背景や人物像を通して主題に迫るという物語文の読解方法の一つの手法であることを確認する。
考えさせる	理解確認	２「５月」と「１２月」の対比を、かにから見える世界を通して２人組で説明し合う。 ・５月はきらきらしていて明るいけど川底のかにたちはかわせみや魚たちに狙われていてびくびくしながら生活をしている。でも、１２月のかには、月光の下で暗いけど、あわ比べをしたりやまなしが落ちてきたりして、のんびりと平和な感じがする。 ・１２月の方が賢治の押す世界観だったんだね。	・イーハトーヴの夢の賢治の理想と現実を思い出させるように前時までの学習を振り返る。 ○賢治の表現する対比が自分の言葉で説明できるか明確にする。理由を友達により分かりやすく説明ができるようにする。
	理解深化	３　理解深化の問題を解く。 賢治はなぜ題名を「やまなし」にしたのだろう。賢治の生き方や考え方と関連づけて考えよう。 ○自分の考えを友達と交流しよう。 ・１２月はやまなしは、落ちてきて、お酒になってかにたちに恵みを与えてくれるから「やまなし」にしたと思う。平和な感じだから賢治の理想だったんじゃないかな。 ・５月はきらきらしているのは、富国強兵で日本の地位は上がった。でも、災害や戦争で人々は苦労していた時代だから「かわせみ」は賢治の理想とは違ったんじゃないかな。だから「やまなし」という題名にしたんだよ。 ○班の人と意見交換をし、理解を深める。 ○話し合った内容を発表する。	☆イーハトーヴの理想と現実が読み取れていないため、5月と12月の違いが何となく色や出来事の違いでしかとらえられない。 ○「イーハトーヴの夢」で、賢治がどんな世界を求めていたか想起させたり、社会科の学習で学んだ賢治の生きた明治時代の様子と関連付けたりできるようにする。 ・交流がスムーズに行えるよう前時までの５月と１２月の対比表を見ながら、考えさせる。
	自己評価	４　今日の学習を振り返る。 ㋯　５月は、日光で明るいけど、「かわせみ」の鋭い怖いイメージを押してはいない。でも、１２月は少し月光で暗いけど、「やまなし」が、かにたちに恵みを与えてくれて、平和な感じがするから、賢治は「やまなし」という題にしたと思う。 ５次時の予告をする。 ○違う作品でも賢治のメッセージを読み取ろう。	○分かったことや分からなかったことを自分の言葉でノートにまとめさせる。 交流を通して、自分の読みと友達の読みを比べ、賢治の世界観を自分なりに確認し題名の意味を説明できる。（発言・ノート）

5年生「千年の釘に挑む」
単元：本はともだち

■今回の指導案の見所

本時は、「千年の釘にいどむ」の内容理解を深める時間である。後述するように、１時間でこれを達成しようとするのは、かなり時間的に厳しかった。ただ、その中でも、本文で白鷹さんが工夫した３つの内容について、子ども自身が説明するという活動を取り入れている点は興味深い。「内容を理解しているのか」の基準として、なんらかの質問に対して正しい答えを返せることも１つの理解の指標であり、従来の多くの授業では、教師からの発問に対して子どもが答えるという形で理解を確認したり、深めたりということが目指されてきたのではないだろうか。一方で、この授業では、子ども自身が白鷹さんの行った３つの工夫を自分たちの言葉で、場合によっては図などを指し示しながら説明するということをもって、理解ととらえ、子どもたちに求めている。指導案上は必ずしも明記されているわけではないが、「内容を自分の言葉でわかりやすく説明できることが、本文を理解したことになるのだ」というメッセージを子どもたちに伝えているのである。

■実際の授業を行った上での課題

上述したような重要な発想の展開を含んだ授業提案であったが、やはり１時間で「千年の釘にいどむ」を十分に捉え切るのはなかなか難しかったのが現実であった。事後の議論でも、せめて２時間は必要であったのではないかという話になった。例えば、１時間で白鷹さんが行った３つの工夫を読み取ることに専念し、もう１時間はなぜそうした工夫を白鷹さんが行ったのかを考えることにあててもよかったのではないかという考え方も見られた。白鷹さんが工夫を凝らし続けた背景には、「千年先の職人が自分の釘をみたとしたらどういわれたいのか」という一つの信念が存在する。人間の行動のすごさを考えるうえでは、この人を突き動かす背景となる思いまで捉えることが有効である。なぜならば、行動そのものには（子どもたちは釘職人ではないので）共感できなくても、行動の背景となる信念を知ることで、自分はそのように考えられるだろうかとすごさを実感することとなる。以上をふまえて２時間分の授業を考えてみると、最初の１時間は、「内容を理解したとは、教科書がなくても自分の言葉で図などを指し示しながら説明できること」というコツを共有し、白鷹さんの３つの工夫について説明できるくらいにまで理解することを目指す授業が考えられる（これを踏まえると例えば以下のような流れも考えられる。「教師の説明」として、工夫の一つを取り上げて具体例を伴いながらコツを説明する。「理解確認」として、教師と同じように、図を指し示しながら工夫を説明ができるのか、同じ工夫を使って確かめる。さらに「理解深化」で、残り二つの工夫について、グループで説明する準備をしてもらい、誰かに発表してもらう）。次の２時間目では、「その人がな

ぜそうした行動をとったのかの信念まで掘り下げて考えてみると、自分にひきつけて考えることができる」といったコツを伝え、白鷹さんの事例を使いながら、なぜそうした工夫や行動をとったのかの信念をつかみ、最終的にはいかにすごいのかをグループで考えてもらうという授業も考えられる。この案を踏まえると、「教師の説明」では、「その人がなぜそうした行動をとったのかの信念まで掘り下げて考えてみると、自分に引き付けて考えることができる」といったコツを伝え、白鷹さんの事例を使いながら、なぜそうした工夫や行動をとったのかの信念を児童とやりとりしながらつかませる。その後、隣の人がそれを知らない人だと思って、白鷹さんはなぜそのような工夫や行動をとったのかを自分の言葉で説明してもらう（「理解確認」）。最後に、グループで、白鷹さんはどこがすごいのか、グループで考えてもらい、発表してもらうという授業の流れもありえたのかもしれない。いずれにしても、問いに対してキーワードや文で答えを返すのではなく、本人自身がその内容を自分の言葉で語れることを理解と捉える発想は、従来の国語教育には十分には見られなかった新しい発想であっただろう。

（文責：植阪友理）

第５学年１組　国語科学習指導案

指導者　寺田　育代

１　単元名　本は友達「広がる、つながる、わたしたちの読書　千年の釘にいどむ」

２　本時の活動（３／６）

（１）目標　白鷹さんが古代の釘を調べるためにしたことや、自分の釘を完成させるためにしたことを説明することを通して、白鷹さんの願いや白鷹さんの素晴らしさを伝えることができる。（読むこと）

（２）本時のおさえ

【教えること】　　白鷹さんがしたこと

【考えさせること】　したことに込められている白鷹さんの願い

（３）準備物

教師…古代の釘の見事さを表している教科書の図　白鷹さんの会話文

（４）本時の展開

授業	学習活動　・児童のあらわれ		○留意点　☆困難度査定 ・支援　評価
前	予習	○前日に「千年の釘にいどむ」を読む。	
「教える」	教師からの説明	1 めあての確認をする。 め 白鷹さんの願いや白鷹さんの素晴らしさを伝えよう。 ○白鷹さんがしたことを教科書で示す。 （古代の釘の見事さを調べるためにしたこと） ・純度の高い鉄を用意した。 ・古代の釘の形に注目した。 ・炭素を混ぜる分量を変えて実験した。 （自分の釘を完成させるためにしたこと） ・納得のいく釘を完成させるまで何本も何本も作り直した。	○白鷹さんの願いや素晴らしさを作品を読んだことがない人に伝えるという目的で読み取ることを伝える。 ○白鷹さんは、古代の釘を調べて自分の釘に利用するためにしたことが３つあり、さらに、自分の釘を完成させるためにしたことがあることを押さえる。
「考えさせる」	理解確認	2 白鷹さんが古代の釘を調べるためにしたことを図を使って説明する。 ○白鷹さんが調べた釘は、どこがすごいのか図を使って説明しよう。 ・普通の釘は50年が寿命。しかし、純度の高い釘は、千年経ってもさびてくさらない。 ・先からだんだん太くなって、頭の近くになるとまた細くなる形は、すき間がうまって釘が抜けなくなる。 ・炭素をまぜて作った釘は、節を割らないように、ぐるりと節をよけて曲がる。	○古代の釘がどんなにすごいのかを、図を使って説明させる。 ○グループで話し合い、まとめて発表することで考えを共有する。 ・グループの話し合いにつまっているところには教科書をもう一度読むようにアドバイスする。
	理解深化	3 調べたことを使って自分の釘を完成させた白鷹さんはどこがすごいのか説明しよう。 ・納得するまで２万４千本もの釘を作った。 ・千年先に自分の釘を残そうと思っている。 ・千年前の釘やかじ職人に負けまいとしてる。 4 白鷹さんの素晴らしさはどこだろう。 ま 千年先まで残る釘を作るために、千年前の釘の見事さを調べ、それに負けない釘を作ろうと何本も作り直した。千年後の人にすごいと思われたいという職人の意地がすばらしい。	○白鷹さんは納得できるまで何度も作り直していることに着目させる ☆すごさをイメージできない児童のために２万４千本はどれくらいかを示す。長さ富士山190個分。 白鷹さんの願いや素晴らしさを読み取り、伝えることができる。 （発表・ノート）
	自己評価	5 今日の学習を振り返る。	○授業の感想を自分の言葉でノートにまとめさせる。

4年生「一つの花」
単元：物語を紹介しよう

■この指導案の見所

本単元からは２本の指導案を収録している。４時間目では、「繰り返し出てくる言葉」に着目するという読み方のコツを取り上げている。この作品において、戦時中を語るキーワードとして、「一つ」という言葉が繰り返し出てくる。ゆみ子の「一つだけちょうだい」ももちろんそうであるし、タイトルとなった、「一つの花」もこれに当てはまる。一方で、戦後はこの表現が出てこない。これは、戦時中という時代背景を考えると、よく分かることである。しかし、戦時中というイメージがなく、物がなく苦しかった時代があったということもイメージしにくい子どもたちにとっては、捉えることが難しいのが実際である。このキーワードが戦争中にのみ使われ、戦後には使われていないということを（気付かせるのではなく）改めて共有し、そこから読みを深めてもらう設計となっている。理解確認では、戦時中は一つだけという言葉が多く使われているが、戦後にはこうしたことが出てこないことに、子ども自身が説明してみるという機会が設けられており、繰り返し使われているキーワードを利用しながら内容を捉えるということを、特定の子どもだけでなく、全員の子どもが実感できるようになっている。その上で、理解深化では、「一つの花」というタイトルに立ち戻り、どのような思いがこめられているのかを、グループで話し合う形となっている。「一つだけ」というキーワードにこめられた意味をクラス全体の子どもが理解しているからこそ、深いグループ内での議論が可能になると期待できる。

また、繰り返し使われているキーワードに着目してみるということは、他の作品を読む上での、作品を紹介する上でも有効である。それをふまえて、６時間目では、紹介文を書くコツとして「繰り返し出てくるキーワードに着目する」というコツが伝えられ、実際にどのように紹介文を書いていったら良いのかも合わせて指導される設計となっている。読み方のコツは、毎回新たに紹介されるものであると同時に、様々な活動（教科書の読み取り、平行読書の読み取り、紹介文の作成）で使える設計になっており、コツを意識する機会が多く設けられているとともに、コツの価値がより実感しやすい流れとなっている。

こうした授業を実施した結果、紹介文を交流する際の共通理解となり、友達も自分と同じような方法で書いていると感じられ、交流が楽しい！という感覚につながった。具体的には、１学期末の「学校の通信簿」（プレゼン資料参照）において、子どもたちが、「ここに残った文を書くのが好きになってきた」「友達の文を読んだり、話を聞いたりする交流学習が楽しかった」という記述が見られた。

■実際の授業を行った上での課題

４、６時間目の授業について、１点ずつ挙げたい。４時間目の授業では、戦時中には「一つだけ」ということが繰り返し出てくることや、戦後には出てこない

ことが共有されているが、「なぜ」ということについては明示的に共有されていない。読書量等が多く、戦争についてある程度のイメージがある子どもにとっては「一つだけ」が戦時中のみで使われていることがなるほどと思われる一方で、そうした経験が少ない子どもにとっては、必ずしもピンときていない可能性がある。「なぜ、『一つだけ』と言うキーワードは戦時中だけなのか」ということを前半のどこかの段階で押さえておくことが、理解深化においてより深い議論へと誘うためには有効ではなかったかという話題も出た。

また、６時間目の授業では、紹介文を書くコツとして、これまで学習した「繰り返し出てくるキーワード」などを挙げ、子どもたちが見通しを持てるようにしている。一方で、授業の冒頭にはコツを生かした紹介文の例は示されていない。これらのコツはすでに読み方のコツとして指導されているものも少なくないことから、子どもたちはあまり困難を感じずに活動に取り組んだようだが、それでも書くことへの抵抗感が強い場合には、コツが教示されても、具体的にどのようにそれを生かすのかがわかりにくいこともあるだろう。交流を通じて、友達の例をみることにはなるが、そのときに学んだだけでは、自分で実際書いてみることにはつながらない。コツをどのようにすれば生かすことができるのか、なるほどと思えるようないくつかの例を示してあげることが、有効ではなかったかという案が出た。また、理解確認では、コツが生かせずにあまり上手に書けなかった例を教師があえて作り、コツを生かしながら紹介文を改善していくためにはどうしたらよいのか考えてもらうという時間を短時間で設けることで、困った時にはコツを生かせばよいという意識がより強まったのではないかと考えられ、そうしたアイディアも出た。

いずれにしても単元を通じて幾つかのコツを軸に、教科書の読みに活用したり、平行読書の読みを活用したり、紹介文を作成したりと、一貫して指導案が組まれたことによって、子どもに、力がついたことが実感できる時間だったのではないかと感じる。

（＊４時間目の授業の指導案は、当日共有したものに若干の修正をいれている）

（文責：植阪友理）

第４学年１組　国語科学習指導案

指導者　鈴木　博之

１　単元名　物語を紹介しよう（中心教材：「一つの花」）
～平和をテーマにした物語で、平和について考えよう～

２　本時の活動（本時　６／８）

（１）目標
「一つの花」の紹介文を書き、それを紹介し合うことを通して、物語を紹介するときの要素を理解し、自分と友達の感じ方の違いや紹介する良さに気付くことができる。　（読むこと）

（２）本時のおさえ
【教えること】　「一つの花」を友達に紹介するには、物語の題名や登場人物、時代背景、季節、出来事、心に残った言葉や文などから選んで紹介する。
◆交流学習では、自分と友達の考えを比べることを通して、似ている点や違う点に気付いたり友達の良さを認め自分の考えをさらに明確にする。
【考えさせること】◇紹介文の中心をどの要素を選べば自分の考えを分かりやすく伝えることができるか考える。

（３）準備物
・教師…文章構造図、付箋　　・児童…ワークシート

（４）本時の展開

授業		学習活動　・児童のあらわれ	○留意点　☆困難度査定 ・支援　評価
前	予習	前日までの学習を確認する。	○家庭で本読みをする。
「教える」	教師からの説明	1　めあての確認をする。 め 「一つの花」をしょうかいして、「もう一度読んでみたいな。」と、友達に思ってもらえるようにしよう。 ○紹介文の書き方を確認する。 紹介文を書くときは、物語の題名や登場人物、時代背景、季節、出来事、心に残った言葉や文などから選んで書く。	○「文章構造図」やノートに書いた「心に残った言葉や文」、前時に書いた付箋を確かめる。
「考えさせる」	理解確認	2　事前に書いた付箋から、紹介文にどの事がらを中心にするか決め、話の順番を決める。 ・登場人物に着目する。 ・題名と「一つだけ」の言葉に着目する。 ・場面ごとの出来事を整理する。	○どの付箋が紹介の中心になるのか考え紹介の順番を決めるように伝える。 ☆どの内容を選ぶか困っている児童には今までノートに書いた「心に残っている言葉や文」を読み返し、その中から選ぶとよいと言葉掛けをする。
	理解深化	3「一つの花」の紹介文を書く。 自分の考えを分かりやすく伝えるために、何を中心に紹介文を書けばよいのだろう。 ・「一つだけ」という言葉が印象に残ったから、このことを紹介の中心にしよう。 ・戦争という時代と「一つだけ」との関係について話してみよう。 ・ゆみ子と両親の家族の絆について話してみよう。 4　ペアで紹介し合い、感想を交流する。 ・ぼくと同じ言葉が心に残ったんだな。 ・わたしと違う考えをもっているな。もう一度「一つの花」を読んでみよう。	○紹介文を書いたり交流したりする時間を十分に確保する。 ・机間指導しながら、付箋の整理ができない子や理由付けでつまずいている児童には、自分が一番何を紹介したいのか確認してから書くように支援する。 ☆ペア学習が上手くできないＴ男、Ｙ男、Ｓ男、Ｋ子、Ｍ子には、相手を見つけているか確認し、自信をもって伝えるように励ます。 ○交流学習では、自分と友達の考えの似ている点や違う点に気付いたり友達の良さを認め、自分の考えをさらに明確にする。
	自己評価	5　今日の学習を振り返る。 ま ・自分と同じ言葉や文が心に残った友達がいた。 ・自分が気付かなかった大切な言葉や登場人物の気持ちを考えることができた。 ・もう一度「一つの花」を読んでみて、自分の感じ方を確かめたい。	○交流を通しての感想を自分の言葉でワークシートに書くように指示する。 物語を紹介するときの要素を理解して紹介文を書き、自分と友達の感じ方の違いや紹介する良さに気付くことができたか。（ワークシート、ノート）

第４学年２組　国語科学習指導案

指導者　榛葉　佑佳

１　単元名　物語を紹介しよう（中心教材：「一つの花」）
～平和をテーマにした物語で、平和について考えよう～

２　本時の活動（本時４/８）

（１）　目標

３の場面の登場人物の気持ちや世の中の様子などを読み取る活動を通して、作者がなぜ「一つの花」という題名を付けたのか自分なりの思いを持つことができる。（読むこと）

（２）　本時のおさえ

【教えること】　人物の気持ちや様子は、「状況」「出来事」「人物の行動・会話」から読み取ることができる。
作者が特別な意味を込めた言葉は、「題名」「人物の会話」「重要な場面」などで繰り返し用いることができる。

【考えさせること】なぜ作者は、この物語に「一つの花」という題名を付けたか。

（３）準備物　教師…文章構造図

（４）本時の展開

		○学習活動　・児童のあらわれ	○留意点　・支援 ☆困難度査定　評価
授業前	予習	○前日までの学習を確認する。	○家庭で本読みをする。
「教える」	教師からの説明	１　めあてを確認する。 め 作者はなぜ、「一つの花」という題名を付けたかを考えよう。 ○場面の読み取り方を確認する。 人物の気持ちや様子は、「状況」「出来事」「人物の行動・会話」から読み取ることができる。 作者が特別な意味を込めた言葉は、「題名」「人物の会話」「重要な場面」などで繰り返し用いられる。 ２　３の場面を読み取る。 ○３の場面を音読し、戦後のゆみ子とお母さんの暮らしを読み取る。 ・ミシンは今まで出てこなかったけど、３の場面では、出てきました。 ・ゆみ子がスキップをしていて楽しそうに買い物に出掛けています。	○読み取り方のポイントをカードにして掲示する。 ・Ｓ男、Ｓ男、Ｅ女：黒板のカードを手がかりにするよう声掛けをする。 ☆文章構造図を使い、比較しにくいところを捉えやすくする。
「考えさせる」	確認　理解	○「戦争中」と「戦後」の違いをまとめる。 ・食べ物の種類が増えたし、買い物に出掛けるようになりまた。 ・前は一輪だったけど、３に場面ではたくさんになっています。	
	理解深化	３　理解深化の問題を解く 作者はなぜ、「一つの花」という題名をつけたのだろう。 ・「一つの花」には特別な意味が込められているんだね。 ・「一つ」の物を大切にして欲しいという思いが伝わってきます。 ４　ペアで理由を交流し合う。 ・私の意見とＡさんの意見が似ていました。 ・Ｂさんの意見は思いつきませんでした。 ５　交流した体験を、全体で共有する。 ・戦争中も戦後もコスモスは出てくるので、戦争中と戦後をつないでいる花だから「一つの花」にしたと思います。 ・お父さんから最後にもらったコスモスのことなので、お父さんがゆみ子の事を思う気持ちを表現したかったんだと思います	○「教師からの説明」で提示したカードをもう一度全体で確認する。
	自己評価	６　今日の学習を振り返る。 あ 作者は「一つの花」という題名に、お父さんの深い愛じょうや時代をつないでいるコスモスの花を表現したかったのだと思いました。	評価 「一つの花」という題名にこめた作者の思いを読み取ることができる。（ノート・発言）

4年生「ごんぎつね」
単元：読んで考えたことを話し合おう

■今回の指導案の見所

本時は、「ごんぎつね」の冒頭の場面を学ぶ時間であった。ここでは、兵十の気持ちは、情景描写を参考にすることで、より深く読みとることを学ぶ。具体的には、兵十は多くを語っていないが、情景描写から兵十の気持ちが読み取れる箇所が多く見られる。例えば、以下のように、にごっていて流れが速いにもかかわらず川に入って必死にうなぎをとる兵十の様子からも必死な兵十の気持ちがうかがえる。

「川はいつもは水がすくないのですが、三日もの雨で、水がどっとましていました。ただのときは水につかることのない、川べりのすすきやはぎのかぶが、黄色くにごった水に横だおしになって、もまれています。」

この他にも、「（うなぎをとっている兵十に）円いはぎの葉が一まい、大きなほくろみたいにへばり付いていました」といった表現もあり、ここから脇目もふらず母親のために必死になっている兵十の気持ちも読み取れる。

こうした巧みな情景描写に注意を払い、そこからより深い読みを自発的に、自然に行う子どもも当然いる。しかし、残念ながらすべての子どもがそうした点を意識するわけではない。注目してみる視点を定め、改めて問いかけることで、普段はそうしたことに目がいかない子どもたちもそうした読み方のコツを知り、今後自分たちの読みに生かせる力につながる可能性がある。本時では、こうしたことを意図して授業設計を行なっている。

この授業では、事前の予習として、兵十の気持ちがわかる部分に線を引かせている。授業の冒頭では、兵十の設定を確認したのち、具体的な言動だけからのみならず、場面の様子（情景描写）からも兵十の気持ちが分かることを、上述した「黄色くにごった川」の部分を使いながら教えた。その後、理解確認として、冒頭の場面からいくつか切り出したワークシートを与え、この他に兵十の気持ちが読み取れる場所がないかと問いかけた。具体的には、「円いはぎの葉がついている」部分などを指摘してもらうことを想定していた。最後に、理解深化として、「うわぁ、ぬすっとぎつねめ」に続く兵十のセリフをグループで考えてもらった。教師の想定としては、「おっかぁのために必死でとったうなぎを、いたずらして逃すなんて許せない！」など、情景描写などからもうかがえる兵十の必死さをうまくくみとったようなセリフを作れることを期待して課題設定を行った。

■実際の授業を行った上での課題

子どもたちは非常に活発に授業に参加し、交流を楽しむことができていた。課題として議論された点は、理解確認の課題設定であった。ここでは、兵十の気持ちが読み取れる部分は他にないかなということで子どもたちに問い掛けた。子どもたちは積極的に見付けてきた一方で、必ずしも情景描写ではない部分をあげた子どもたちもみられた。今回の授業の主眼は「情景描写に注目することで、

おり深く気持ちを読み取る」ということであった。この目的をより多くの子どもが意識するためには、「場面の様子の中から、兵十の気持ちが読み取れる部分はないかな」とある程度絞った形で問いかけることも必要ではなかったかという議論もなされた。

（文責：植阪友理）

第４学年２組　国語科学習指導案

指導者　榛葉　佑佳

１　日時　　平成２８年９月２８日（水）　２校時

２　単元名　読んで考えたことを話し合おう（中心教材：「ごんぎつね」）

３　本時の活動（本時４/13）

（１）目標

本文に書かれている情景描写や人物の行動や会話を見つける活動や、人物と自分の気持ちを重ね合わせたり、自分の経験と結び付けたりする活動を通して、人物の心情を想像豊かに読み取ることができる。（読むこと）

（２）本時のおさえ

【教えること】

・人物の気持ちや性格は、「行動」「言葉」「情景描写」に着目し、想像しながら読み取ること。

【考えさせること】

・１の場面では、どのような「行動」「言葉」「情景描写」が書かれているか。そこから人物のどのような気持ちを読み取ることができるか。

（３）準備物　　教師…挿絵　掲示用本文　ワークシート

（４）本時の展開

		○学習活動　　・児童のあらわれ	○留意点　・支援 ☆困難度査定　評価
授業前	予習	○１の場面の音読をする。兵十の気持ちが分かる部分に線を引く。	
「教える」	教師からの説明	１　めあてを確認する。 ㋮ １の場面を読み、兵十の気持ちを読み取ろう。 ○１の場面を読み、兵十の設定や性格を確認する。 ・貧しくて、母親のことを思っている。 ○兵十が、ごんにされたことを確認し、兵十の気持ちを書く。 ・おっかあのために、せっかくうなぎをとったのに悲しい。 ○川の色から（情景描写から）兵十の気持ちを読み取ることができることを、全員で確認する。 ・川は黄色くにごっています。にごっていて流れが速いのに兵十は川に入ったから、必死さが伝わってきました。 （もずの声や天気の叙述と対比させる。）	○Ｐ８～P9L3 の中から読み取るようにする。 ○情景描写について理解できるよう、対話を通して確認していく。 ・理解できているか、意図的指名をして確認する。
「考えさせる」	理解確認	２　１の場面で他に兵十の気持ちがわかる情景描写をペアで探す。 ・「横だおしになって、もまれています。」から、川の流れが速くて危険なのにも関わらず、川に入っていることが分かります。兵十は何としてでも今日うなぎがほしいから必死になっています。	☆探す手がかりとして、範囲や個数を提示する。 ・読み取りが苦手な D 男、S 男、E 女、R 男には、自力で読み取れた部分を認め励まし、読み取る視点を教える。
	理解深化	３　こつを使って、１，２以外から兵十の気持ちを読み取る。 ・「円いはぎの葉が～付いていました。」から、普通なら顔に付いたら取るのに、兵十はそれよりもうなぎを取ることに夢中になっているので、焦っている様子が伝わってきます。 １の場面から読み取ったことから、兵十の「うわあ、ぬすっとぎつねめ。」に続くせりふを考える。 ・おれがおっかあのために必死でとったうなぎを、いたずらして逃がすなんで絶対に許せない。	○児童が自分の経験を想起できるように、教師が例を挙げて説明する。
	自己評価	４　最初に書いた気持ちと比べ違いを伝え合う。 ・最初は悲しいと思ったけど、風景や言葉に着目して読んだら必死な気持ちや、とても怒っていることが読み取ることができた。 ５　今日の学習を振り返る。 ㋷ 「行動」「風景」に着目して読んだら、初めよりも兵十のゆとりのない気持ちやどれくらい怒っているかがわかりました。	評価 文章からこつを使って人物の気持ちを読み取ることができる。 （ノート・発言）

3年生「もうすぐ雨に」
単元：読んで感じたことを発表しよう

■今回の指導案の見所

本単元では、「もうすぐ雨に」をファンタジー教材とし、最終的にファンタジー作品を友達に紹介するという活動を最終的に設けた。本時は、ファンタジーの一作品として、「もうすぐ雨に」を深く読み取る時間である。この授業の特徴は、「ファンタジーには、入り口と出口がある」というファンタジーを読み取るコツを子どもに教えるところにある。例えば、この作品では、ちりんちりんという猫のトラノスケの首輪の音がきっかけとなり、動物の言葉がきこえるようになる。これがファンタジーの入り口と考えられる。その一方で、雨の音が大きくなり、ちりんちりんという音がかき消されていく。それと同時に、動物の声も聞こえなくなる。これが出口と考えられる。これと同様の構造は多くのファンタジー作品に見られる。例えば、浦島太郎では、亀に乗って竜宮城にいくというところが入り口であり、亀に乗って浜辺にもどってくるということが出口となる。子どもたちにとって身近である「千と千尋の神隠し」では、洞窟に入ることがファンタジーの入り口であり、そこから出てくることが出口となる。多くのファンタジーに共通する構造であるが、なかなか意識されにくい部分について意識化し、そのことを通じてより深く読もうとするのが、この指導案の特徴である。

さらにこの授業でもう一つの特徴となるのは、単に「ファンタジーには、入り口と出口がある」という構造を教えるだけではなく、どんなことが入り口と出口を見付ける上での手掛かりとなるのかを子どもに教えている点にある。例えば、この作品では、上述したように音が手掛かりとなっている。本授業では、冒頭に浦島太郎や「千と千尋の神隠し」を素材に、この構造を教えた上で、出口と入り口を見付けるための手掛かりとして、音、色、においに着目することが有効であることも教えている。この授業では、ファンタジー作品の入り口と出口という構造と、その見付け方を、子どもたちにとって馴染みのある作品で教え、この作品に即して入り口のやりとりをしながら見付けたのち、理解確認として出口を見付けてもらった。そして、理解深化課題では、動物の声が聞こえなくなってしまった主人公は、変わったと言えるのか、言えないのかを全体で議論するという活動を設けている。

「読み方のコツ」と言われると、一般的に想起するのは、この授業においても取り上げられているような、「音、色、においに着目してみよう」といったレベルのことであろう。しかし、これだけではなかなかどう読みを深めていったら良いのかがわからないのが実態であろう。この授業では、入り口と出口があるというファンタジー作品の構造に即しながら、それを見付ける手掛かりとして「音、色、においに着目してみよう」についても合わせて教え、それを軸にしながら後半の活動へとつなげていくという点が一つの見所と考えている。

■実際の授業を行った上での課題

「教えて考えさせる授業」では、「困難度査定」（詳細は市川・植阪、2016 を参照）といわれるように、当該授業における学習者のつまずきを推し量り、授業設計に生かすことが重視される。こうした査定は、実際に授業を行ってみると更新されることがあり、「困難度再査定」と呼ばれることもある。この授業では、まさにそうしたことが見られた。理解確認で求めた、出口の見付け方が子どもたちにとってとても難しかったのである。音に着目するということの意味が十分に理解されておらず、様々な場所を出口ではないかと述べたのである。授業では、入り口の音と対応付けて考えてみると良いことが共有され、ここではじめて一部の子どもたちから、「なるほど、そういうことか」という言葉が聞かれた。国語における「教えて考えさせる授業」では、実技系の「教えて考えさせる授業」の枠組みにならって、教師の説明において「コツは具体例を伴って教える」ことが強調されることが少ない。今回も、「入り口と出口があり、それらを見付ける上では音が有効である」ということを実感を持ってなるほどと思ってもらうためには、教える部分において「もうすぐ雨に」の作品に即すると、入り口と出口はどこになるのか、それはどうやれば分かるのかを教えてあげてもよかったのではないかという意見も見られた。

なお、その場合には、理解確認では、「『もうすぐ雨に』の入り口と出口とはどこか、それはどうしてそこだと言えるのかを、隣の人はわかっていない人だと思って説明してみよう」といった活動を設けることが有効ではないかと考えられた。こうした活動を設けることで、ファンタジー作品の読み方のコツとして何をこの授業で教師は伝えようとしているのか、子どもたちには分かりやすかったかもしれないというわけである。

（文責：植阪友理）

第３学年２組　国語科学習指導案

授業者　太田　充

１　日時　　平成２８年５月２０日（金）　第５校時

２　単元名　読んで感じたことを発表しよう
「もうすぐ雨に」（本時　５／９）

３　単元の目標
・ファンタジーの世界を楽しみ、友達の考えのよさを認めながら、文章を読んで考えたことを進んで伝えようとする。（関心・意欲・態度）
・場面の移り変わりに注意しながら、登場人物の行動や気持ちの変化について、叙述を基に想像して読むことができる。（読むこと）
・文章中の語句の効果を考えながら読み、感想を交流する学習を通して、読み深めた感想を表現するための語彙を増やすことができる。
（伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項）

４　単元構想
（１）単元観

本教材「もうすぐ雨に」は、初めは動物の声が聞こえる現象を信じることができなかった「ぼく」が、最後には生き物も自分と同じように感情をもち、それぞれの都合や生活があると考えることができるようになる物語である。構成・現象のパターン化がされていること、個性あふれる登場人物であること、一人称で書かれた作品であることなどの理由で、臨場感があり、感情移入しながら読み進められる。特に「チリン」という音が聞こえるという合図の後、生き物の会話が聞こえるという現象が何度も繰り返されることで、「ぼく」を通してファンタジーの世界に入っていくことができる。また、「始まり（起）」「展開（承）」「山場（転）」「終結（結）」の物語の基本的な構成を学ぶことや、言動から人物像を読み取ること、主人公の心情の変化を考えること、叙述を根拠に想像して読むことなどができる教材である。根拠となる叙述を探しながら何度も読み返し、叙述を基に想像力を働かせながらファンタジー作品を読み味わおうとする子どもの姿を期待したい。

本教材で身に付けさせたい読みの力は、場面の移り変わりに注意しながら、登場人物の行動や気持ちの変化について、叙述を基に想像して読むことである。あらすじをつかむ時間には、叙述に注目しながら無理なく作品全体を読ことができるように、挿絵を並び替える活動を通して出来事を整理したり、物語の構成を知ったりする。また、主人公に聞こえた生き物の言葉に着目することで、５Ｗ１Ｈを読み取る。その中で何度も繰り返される「もうすぐ雨に」の言葉から、雨と不思議な出来事の関連性にも気付くことができるであろう。

後半では「ぼくの言動」から山場に向かう「ぼく」の心情の変化について、読む視点を焦点化する。生き物の言葉が聞こえるファンタジーの入り口、言葉が聞こえなくなる出口におけるぼくの気持ちを考える活動を通して、表面的な読みに留まらず、いくつかの場面を関係付けて読み、深くこだわって読むことの楽しさに気付かせたい。さらに、読み進める中で「姿が見えないのに歌声からかえるたちを思い浮かべるまでに変容した『ぼく』」に気付かせる読みを展開したい。「雨とともに生き物の声が聞こえなくなった理由」を不思議な出来事の終わりとして捉えるだけでなく、生き物の声が聞こえなくても生き物の思いや立場に共感できるまでになった主人公の変容を含めて考えさせたい。

学習への意欲化を図るために、単元の終盤では他のファンタジー作品と「もうすぐ雨に」との比較や感想を交流する活動を設定し、他作品を紹介するために「もうすぐ雨に」の読みを深めたい、という目的意識をもたせる。また、紹介するためのツールとしてリーフレットを利用する。「もうすぐ雨に」の学習を進めながらリーフレット作りを行い、その経

験を基に他作品を紹介するリーフレット作りを行う。

（２）本単元に関する児童の実態（男子１６名、女子２１名）

３年生になり、「きつつきの商売」を学習した。子どもたちは、言葉と言葉とをつなげてきつつきが開いた店の特徴を読むことや、２つの場面を比較して主人公の心情の変化を読むことを経験している。読んで気付いたことや考えたことを積極的に発表する子どもが多い。オノマトペや反復による効果、助詞による意味の違いなどを感じ取る力も育ってきており、これまでの学習を思い出しながら読み進める姿も見られる。また、子どもたちは、根拠となる叙述を問題となる表現の近くから探すことや、自分の考えをある程度まで膨らませて読むことはできる。しかし、複数の叙述を関係付けて読み深める力は十分とは言えない。また、読書は好きであるが、「自分で見付けた」「自分の考えをもてた」といった、個で読むことによる学習の喜びや達成感を感じるような深い読み方はできない。自分で読み進める時間や自分の読みを発表する場を保障しつつ、グループや全体での話合いなど、友達と交流することを通して、友達の考えのよさや、叙述から様々な読みができることに気付く経験を重ねることで、読み深める楽しさを味わわせたい。

（３）学習計画（全９時間）

時	○目標　・主な学習活動 ☆困難度査定	◆「教えること」 ◇「考えさせること」 ◎読むためのこつ	評価規準
予習	・語句の意味調べをする。		
1	○おすすめのファンタジー作品を友達に紹介するという目的意識をもつ。 ・ファンタジー作品の紹介を聞く。 ・「もうすぐ雨に」のリーフレット作りを通して、他のファンタジー作品の紹介リーフレット作りにつなげていくという活動の見通しをもつ。 ○題名にどのような意味があるのか考える。 ・題名から想像を広げながら読み、初発の感想を書く。 ☆初発の感想をもつことができない。	◆ファンタジー作品とは何か。 ◆キーワードになりそうな言葉の意味 ◎リーフレット作りを通して読みを深める。 ◎題名に注目する ◇初発の感想をもつこと。	題名から物語の内容を想像しながら「もうすぐ雨に」を読み、初発の感想を書いている。 （ノート） （関・意・態）
2	○文の組み立てを確かめる。 ・挿絵を並び替える。 ・あらすじの書き方を知る。 ・あらすじを捉える。 ☆あらすじを記述できない。	◆起承転結とは何か ◆あらすじの書き方 ◎あらすじを捉える。 ◎文と図や絵を結び付けて考える。 ◇物語のあらすじを捉える。	出来事の変化に注意しながらあらすじを確かめている。 （ワークシート・発言） （読むこと）
3	○「承」の場面における「ぼく」の気持ちを考える。 ・気持ちが読み取れる箇所に付箋紙を貼り、考えたことを記入する。 ☆叙述を根拠にすることができず、付箋紙を貼れない。	◆行動、発言内容から気持ちを捉えることができる例 ◎行動、発言内容に注目する。 ◇主人公の気持ちを考える	主人公の気持ちの変化について叙述を根拠に読み取っている。 （付箋紙・発言） （読むこと） （読むこと）

4	○「転」の場面における「ぼく」の気持ちを考え、変化を捉える。 ・気持ちが読み取れる箇所に付箋紙を貼り、考えたことを記入する。 ☆叙述を根拠にすることができず、付箋紙を貼れない。	◆行動、発言内容から気持ちを捉えることができる例 ◎行動、発言内容に注目する。 ◇主人公の気持ちを考え、変化したことを捉える	主人公の気持ちの変化について叙述を根拠に読み取っている。 （付箋紙・発言） （読むこと）
5 本時	○ファンタジーの入口と出口を考える。 ・入口がどこか叙述を根拠に確認する。 ・出口がどこか叙述を根拠に考える。 ○不思議な出来事の前後で、「ぼく」はどう変化したか考える。 ・「ぼく」の変化を、出来事の前後に分けてワークシートにまとめる。 ・トラノスケが何を言いたかったのか考える。 ☆「ぼく」は変化したかとその理由をワークシートに書けない。	◆ファンタジー作品には入口と出口がある。 ◎音・におい・色に注目する。 ◎比べて読む。 ◇主人公がどう変化したか考える。	ファンタジーの世界を経験して、主人公がどう変化したか叙述を根拠に読み取っている。 （ワークシート） （読むこと）
6	○出来事や登場人物の変化について、感想をまとめ、交流する。 ・感想をリーフレットに表現し、完成させる。 ・リーフレットを見せ合いながら、この作品のお薦めは何か話し合う。 ☆リーフレットに表現できない。	◆感想の書き方、リーフレットのまとめ方 ◆交流の仕方 ◇主人公の変化について考えを深めたり、感想をもったりする。	主人公の変化について感じたことや考えたことを伝えようとしている。 （リーフレット） （関心・意欲・態度）
7	○他のファンタジー作品を読み、話し合う。 ・ファンタジー作品を読む。 ・「もうすぐ雨に」と比較し、同じ本を選んだグループで感想を発表し合う。 ☆感想を発表できない。	◆ファンタジー作品の紹介 ◎読みのこつを使って読む ◇物語の組み立てや主人公の変化について感想を話し合う。	ファンタジーの世界を楽しみ、考えたことを進んで伝えようとしている。 （観察） （読むこと）
8	○他のファンタジー作品のリーフレットを作る。 ・リーフレットを作る。 ・同じ本を選んだグループでリーフレットを見せ合う。 ☆リーフレットに表現できない。	◆リーフレットの書き方 ◇主人公の変化について考えを深めたり、感想をまとめたりする。	主人公の変化について感じたことや考えたことを伝えようとしている。 （リーフレット） （関心・意欲・態度）
9	○他のファンタジー作品を紹介し合う。 ・ジグソーグループでリーフレットを基にファンタジー作品を紹介する。 ・感想を発表し合う。 ☆ファンタジー作品を紹介できない。	◆作品の紹介の仕方 ◇主人公の変化について考えを深めたり、感想をまとめたりする。	主人公の変化について感じたことや考えたことを伝えようとしている。 （観察） （関心・意欲・態度）

5　本時の活動（５／９）

（１）目標

○ファンタジーの世界を経験する前後で、主人公がどう変化したか意見を交流することを通して、いろいろな読み方があることを知ることができる。　（読むこと）

（２）本時のおさえ

【教えること】　◆ファンタジー作品には入口と出口があり、その前後で変化がある。
◆本作品の入口と出口がどこにあるか確かめる。

【考えさせること】　◇主人公がどう変化したか考える。

【読むこつ】　◎音・におい・色に注目する。
◎前後を比較する。

【困難度査定】　☆ファンタジーの出口を探し出せない。→音に注目させる。
☆「ぼく」は変化したかとその理由をワークシートに書けない。
→理由につながる視点を与え、前後を比較させる。

（３）準備物

教師…掲示用抜粋文、児童用ワークシート、付箋

（４）本時の展開

		○学習活動　・児童のあらわれ ◆教えること◇考えさせること◎読むためのこつ	○留意点　☆困難度査定 ・支援　評価
授業前	予習	○前日までの学習を確認する。	○家庭で本読みをする。

「教える」	教師からの説明	1　ファンタジーの構造について知る。 ○ファンタジーの構造について説明する。 **◆不思議な出来事への入口と出口がある。** **◆不思議な出来事の前後で、様々な変化が見られる。** 2　めあてを確認する。 不思議な出来事の前と後で「ぼく」は変わったのかな。 3　不思議な出来事への入口がどこか確認する。 **◎読み取り名人のこつ１** **「音、色、においに注目する」** **◆かえるがまばたきした後の最初のチリンが、不思議な出来事への入口である**	○ファンタジー作品を紹介しながら子どもたちとやりとりをし、ファンタジーの構造について確認していく。
	理解確認	4　不思議な出来事の出口がどこか考える。 ・トラノスケの言いたいことが「ようく分かった」のだから不思議は続いている。 ・かえるを助けてあげたのが入口に対して、かえるのことを思い浮かべたのが出口だ。 ・「ふしぎな音も遠い歌声も、雨音にまぎれて消えてしまった。」とあるから、これが出口だよ。	☆チリンの音に注目することで、最後のチリンが鳴ったところはどこか探せばよいことから、出口を探させる。

「考えさせる」	理解深化	5　理解深化の課題に取り組む。 ◇　不思議な出来事の前後で「ぼく」は変わったのか、変わらなかったのか考え、その理由を話し合う。 **◎読み取り名人のこつ２** **「前と後ろを比べる」** 【変わっていない】 ・前も後も「ぼく」はやさしい。 →前：かえるを助けた。 →後：トラノスケの体を拭いてあげた。 ・動物の言葉が聞こえない。 →前：「動物の言葉が分かればいいのにな」 →後：何も言わなかった。 【変わった】 ・トラノスケの行動を予想できるようになった。 →前：すがたは見えなかった。 →後：毛繕いするつもりなんだろう。 ・トラノスケの気持ちが分かるようになった。 →前：用があるのに遊んでいると思った。 →後：なんて言いたいか、ようく分かった ・動物のことを思い浮かべるようになった。 →前：かえるがいて困っていた。 →後：楽しそうなかえるを思い浮かべた 6　トラノケの言葉を考える。 ○「ぼく」はトラノスケが何と言いたいと思ったのか考える。 ・「体を拭いてくれてありがとな。」 ・「ご用は全部すんだぞ。」	☆変わったのか変わらなかったのかどちらかの意見を選ばせ、その根拠を文中から探させる。 ○変化が分かる言動を見付けたら、本文中に付箋紙を貼る。 ○子ども達が考えたり、話し合ったりする時間を十分にとる。 ☆変化を読み取るための視点を提示し、それを基に本文を確認させる。 視点例 ぼくの性格はどうかな 動物の言葉わかるかな 動物の行動を予想できるかな ○読みのこつを使って根拠を明確にした読み取りができている発言を称揚する。
	自己評価	7　今日の学習を振り返り、理解度を確認する。 ま・「ぼく」が不思議な出来事の前と後で変わったことが分かった。 ・友達の意見を聞いていろいろな読み方があることが分かって楽しかった。 ・人物の行動や発言に注目すると読みを深められることが分かった。	○話し合いを通しての感想を自分の言葉でノートにまとめさせる。 ファンタジーの構造の面白さや、主人公の変化について様々な読み方があることを知ることができたか。 （リーフレット、ノート）

（５）授業の視点　「教えて考えさせる授業」に関わる視点を提示する。
「教える」「考えさせる」は妥当であったか。
読み取るためのこつは、子どもの読みを深めることにつながっていたか。

1年生「じどう車くらべ」
単元：くらべてよもう

■この指導案の見所

本単元では、のりものについての働きや形状を紹介した教科書の本文を理解したのち、最終的には自分たちで「のりものブック」を作るという活動を行った。

本時は、実際に自分たちで文章を書くということに初めて取り組んだ時間であった。多くの子どもたちにとって、書くという活動はいやだなぁ、できないと感じやすいものである。実際にこの授業の最初でも、今日は実際に書いていきますというと、えーっ、という言葉が聞かれた。こうした抵抗感を少しでもへらすために、この授業では、書くということは決して特別で大変なことではないという感覚を子どもたちにもってもらう工夫が多く取り入れられている。例えば、ここまでの授業において指導されてきた読むためのコツが、それが実は書くときにも利用できるということを子どもたちに感じてもらう設計となっている。具体的には、これまでの授業で内容を深く読み取るために、①（長い文章ではなく、キーワードなど短い表現を使って）表にまとめてみて、②それを自分の言葉で友達に説明してみる、という活動をやってきたが、実はこれらは書くときにも活用できるということを子どもに分かってもらうという授業設計になっている。

実際の授業の中では、子どもたちがメモをもとに、言葉を付け足しながら活発に説明し合う姿が見られた。学年団の先生の１人は、「メモはちらちらとみているものの、１年生なりの言葉で説明していて、メモをただ読んでいる子どもは誰一人としていなかった。今回はメモを非常に短い文（キーワード）で書かせているので、それを見ているだけでは文章にならはない。メモを見ながら自分の頭で再構成して説明していたのだと思う。大事な力ではあるが、１年生では難しいと思っていたが、ここまでできるのかと驚いた。」と述べていた。子どもたちも、授業の冒頭では抵抗感を示していたが、授業が進むにつれて自信をもってとりくむようになり、授業終了チャイムが鳴ったときには、「もう終わったの？先生、もっとやっていいよ。５０分でもいい」という声があがるなど、自分たちにもできる。やってみたいという思いが強く感じられた。

最終的な「のりものブック」の作成においても、子どもたちは自信をもって取り組む子どもが多く、子どもによってはいくつもの作品を仕上げたと聞いている。子どもたちから、楽しい、もっと書きたいという声も上がった背景には、こうすればできるという見通しが子どもたちの中に生まれたのではないかと考えている。

■実際の授業を行った上での課題

課題として残された点は、書くコツをもうすこし明示しても良かったのではないかという点である。「のりものブック」への取り組み方からもわかるように、この授業全体を通して子どもたちは、こうすれば書けそうだという見通しをもったと考えられる。しかし授業設計を行う教師は、「読み方のコツは書き方のコ

ツにもつながる」と意識していた一方で、子どもたちには必ずしもそうした点を強調していなかった。このため、子どもによっては、なんとなく今回の「のりものブック」についてはこのように書けばよいのだと理解した一方で、より一般的な書き方のコツとしては意識していない可能性がある。書くことに対する苦手意識が高いことは、多くの学年で共通する課題である。こうした問題に対しても中長期的に対処していくためにも、「読み方のコツは書き方のコツにもつながる」という点と、その具体的なやり方を意識化させるような授業設計をもう少し考えても良かったのではないかという意見が見られた。
（＊本報告書に掲載している指導案は、当日のものに若干の修正を加えたものである。）

（文責：植阪友理）

第１学年１組　国語科学習指導案

授業者　芥川　梓

１　日時　　平成２８年１１月１８日（金）
２　単元名　くらべてよもう「じどう車くらべ」～のりものブックをつくろう～（５/８）
３　単元の目標
○のりものブックを作ることに意欲をもって、自動車に関する絵本や図鑑、文章などを読み、進んで調べようとしている。（関心・意欲・態度）
○本や文章の中から、必要な言葉や文を書き抜くことができる。（読むこと）
○「そのために」を使って文と文をつなぎ、自動車の「しごと」と「つくり」を説明する文章を書くことができる。（書くこと）
○長音や拗音、促音などの表記や、句読点を適切に用いて書くことができる。（伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項）

４　単元構想
（１）単元観
乗り物は、児童が興味・関心を示す物の１つである。また、その乗り物がどのような仕事をして、そのためにどんなつくり（形態・構造・仕組み）になっているかということも児童の興味の対象となるだろう。本単元では、特に子どもたちの身近な乗り物を取り上げている。
この「じどう車くらべ」は、「問い＋答え＋答え＋答え」という列挙型の構成になっている説明文である。「どんな仕事をするのか」、そのために「どんなつくりになっているのか」というように問いが２つあり、２つの段落に分けて答えが書かれているという明確な文章構成である。そのため、文章の中から仕事とつくりを見付けやすく、大事な言葉や文を端的に書き抜く力を付けるのに適している。さらに、「そのために」という接続語で仕事とつくりをつなげていることから、事物を説明するときの基本を学習することができる。
まず、教材文に書かれている３つの自動車の内容について読み取るために、問いを明確にさせ、その答えとなる「しごと」について書かれている箇所と「つくり」について書かれている箇所に色分けをして線を引かせる。それによって、どの自動車についても「しごと」「つくり」「つくり」の順で書かれていることに気付かせ、文の構成をとらえられるようにしたい。次に、ワークシートに「しごと」と「つくり」を書き抜く学習を通して、表に合うように文を言い切りの形に変えたり、言葉を抜き出したりする力を付けたい。またワークシートは、「しごと」と「つくり」を分かりやすく区別したり、「そのために」という言葉で「しごと」と「つくり」をつなぐことを可視化できたりするようなつくりにする。そして、ワークシートにまとめたものを見ながら言葉を付け足して友達に説明する活動を繰り返し行うことで、より内容の理解を深めることができると考える。さらに、話して説明するだけではなく、教材文の文型を参考にして「はしご車」や自分で選んだ自動車について書いて説明するという活動を取り入れることで、自分の言葉で説明できる力を付けていきたい。
また、どの自動車においても「しごと」と「つくり」をつなぐ言葉として「そのために」というつなぎ言葉が使われていることに着目させ、説明文を読むときの「こつ」としてつなぎ言葉の役割や大切さを教え、単元を通して「そのために」というつなぎ言葉を使って話したり、説明を書いたりできるようにしていきたい。
授業が進んでいくにつれて、子どもたちが書いた表や説明文のワークシートがつながって「のりものブック」が完成するようにし、楽しみながら意欲的に学習できるようにしていきたい。そして、最後に「のりものブック」を見ながら、学習した自動車の違いを紹介し合うような活動を行いたい。

（２）本単元に関する児童の実態
１年生が今までに学習した説明文は「くちばし」と「うみのかくれんぼ」である。初めての説明文の「くちばし」では、問いと答えがセットになって３回繰り返されている文章を読んで、説明文の基本的なパターンを学習した。そして、本文以外に２種類の鳥のくちばしについて、本文にならって文を書いたことで、問いと答えの形に慣れることができた。また、「うみのかくれんぼ」では、「何が」「どこに」「どのようにして」隠れているのかが同じ文型で書かれているため、ほとんどの児童が「くちばし」での学習を生かして、問いに対する答えをすぐに見付けることができていた。さらに、海の生き物の隠れ方を自分の言葉で説明できる児童も多かった。しかし、中には問いに対する答えが的確に見つけられなかったり、大事な言葉を書き抜けなかったりする児童もいる。
「じどう車くらべ」では、問いに対する答えを正しく見つけて書き抜いたり、「そのために」という接続語を使って説明する文を書いたりできることを目指したい。説明文を書

くという学習は、難しいと感じる児童も多くいると考えられるが、ワークシートを効果的に用いたり、何度も話してから書くという活動を取り入れたりすることで、抵抗なく学習に取り組めると考える。

（３）学習計画（全８時間）

時	○目標　・主な学習活動 ☆困難度査定	○教えること ・考えさせること	評価
1 2	○いろいろな自動車に興味をもち、学習の見通しをもつことができる。 ・全文を読み、学習の見通しをもつ。 ・「のりものブック」を作ることを知らせる。 ○本文を読み、内容の全体を読み取ることができる。 ・「問い」と「答え」について考える。 ・新出漢字や片仮名を学習する。		・自動車について知っていることを話したり聞いたりして、「のりものブック」作りに関心をもち、自動車に関する本や文章を進んで読もうとする。（関・意・態：発表・観察） ・問いが何か、答えがどこに書かれているか読み取っている。（読：発表 ノート）
3 4	○「問い」と「答え」の文型を意識してバスやじょうよう車についての文を読み、仕事とつくりを見つけることができる。 ・バスやじょうよう車の仕事とつくりを見つける。 ○トラックとクレーン車の文を読み、仕事とつくりを書き抜くことができる。 ・トラックとクレーン車の仕事とつくりを表に書き抜く。 ・表を見て友達に説明する。 ☆仕事とつくりを書き抜くこと。 →仕事とつくりに色分けした線を引かせる。	○問い＋答え＋答え＋答えの構成 ○仕事とつくりの関係 ○表に合った書き抜き方 ・トラックとクレーン車の仕事とつくりを表に合わせて書き抜くこと ・表を見て、仕事とつくりを説明すること	・バスやじょうよう車の仕事とつくりを見つけることができる。（読：発表 ワークシート） ・トラックとクレーン車の仕事とつくりを書き抜いている。（読：ワークシート）
5 **本** **時**	○「そのために」というつなぎ言葉を使って説明する活動を通して、はしご車の仕事とつくりを説明する文章を書くことができる ・はしご車の表を見て「のりものブック」の１ページとなる文章を書く。 ☆「そのために」などの言葉を書き足して文にすること。 →書き出しの言葉が書かれているヒントカードを用意する。	○「そのために」の役割 ○表→文章の方法 ・はしご車の仕事とつくりを説明する文章を書くこと	・はしご車についての説明文を「そのために」を使って書いている。（書：ワークシート）
6 ・ 7	○自分の選んだ自動車の仕事とつくりを説明する文章を書くことができる。 ・自分の選んだ自動車について「のりものブック」の１ページとなる文章を書く。 ☆選んだ自動車に合った仕事とつくりを見つけ出すこと。 →その自動車にしかない仕事を見つけるよう助言する。	○選んだ自動車に合った仕事とつくりの見つけ方 ・自分の選んだ自動車の説明文を書くこと	・選んだ自動車について仕事とつくりにあたる部分を書き抜いている。（読：ワークシート） ・長音や拗音、促音などの表記や、句読点を適切に用いて書いている。（言：ワークシート）
8	○学習してきた自動車を比べて、違いを紹介することができる。		・自動車の違いを紹介することができる。（関：発表 観察）

5　本時の活動（5/8）

（1）目標

「そのために」というつなぎ言葉を使って説明する活動を通して、はしご車の仕事とつくりを説明する文章を書くことができる。（書くこと）

（2）本時のおさえ

【教えること】読み取り名人のこつ②

・「そのために」は仕事とつくりをつなぐ言葉であること。

・表を説明文にするためには言葉を付け足すこと。

【考えさせること】　・「はしご車」の仕事とつくりを説明する文章を書くこと。

（3）準備物

教師…はしご車の挿絵・動画、はしご車を説明した文、ワークシート、表の拡大図、ヒントカード

児童…のりものブック

（4）本時の展開

		○学習活動　・児童のあらわれ	○留意点　☆困難度査定　・支援　評価
「教える」	教師からの説明	1　はしご車について興味をもつ。 ・はしご車ってどんな自動車だろう。 ・火事の時に、はたらく車だよね。 2　めあてを確認する。 め　はしご車の「しごと」と「つくり」のせつめいをかこう。 3　はしご車の「しごと」と「つくり」を押さえる。 ○はしご車はどんな自動車か発表しましょう。 ・火を消す自動車だよ。 ・はしごが伸びる自動車だよ。 ・赤い自動車だよ。 しごと　高いところにいる人を助ける。 つくり1　長いはしごがついている。 つくり2　じょうぶな足がついている。 4　メモを見て説明文を書くときのこつをおさえる。 【こつ】 ①「そのために」をつかうと、「しごと」と「つくり」をつなぐことができる。 ②かくまえに、表を作って、おともだちにおはなししてみるとよい。	○はしご車の挿絵や動画を見せ、関心を高める。 ・はしご車の説明の文章を提示し、仕事とつくりを分かりやすくする。 ○児童の関心をさらに高めるために仕事とつくり以外にも児童が知っている特徴を挙げさせる ○児童の意見を踏まえ、仕事とつくりを全体でおさえる。 ・「読み取り名人のこつ」を提示して、つなぎ言葉を意識させる。 ・表を見て話すときに言葉を付け足して話したことを思い出させる。 ○良い例、悪い例を同時に提示することで、こつ①を強調する。

「考えさせる」	理解確認 理解深化	5　「そのために」のはいっていない悪い例を同時に提示することで、こつ①を強調する。 6はしご車について説明する。 ○表を見て、はしご車について友達と説明し合いましょう。 ・上手に説明できてうれしいな。 ・表を見なくても説明できたよ。 ○はしご車のページに説明文を書きましょう。 ・話したことをそのまま書けばいいね。 ・「そのために」という言葉がほしいね。 ・どうやって書き始めたらいいのだろう。 ○できた説明文を読み合いましょう。 ・◎◎さんの説明は上手だったな。 ・はしご車について分かりやすく書けたよ。	○ペアで説明し合う。 ・説明の仕方が分からない児童は、教師と一緒に話すようにする。 ☆「そのために」などの言葉を書き足して文にすること ・話して説明したことを思い出して書けばよいことを伝えたり、ヒントカードを渡したりする。
	自己評価	7　今日の学習を振り返る。 ○今日の授業で分かったことやできたことを書きましょう。 ⓜ ・「そのために」をつかって、じょうずにせつめいがかけた。 ・はしご車は、たかいところにいる人をたすけるために、ながいはしごがついていることがわかった。	○分かったことや難しかったことをまとめのワークシートにまとめさせる。 ・早く書けた児童の何人かに発表させ、書き方が分からない児童のヒントとなるようにする。 「そのために」を使って文と文をつなぎ、説明文を書くことができた。（ワークシート）

第2部　プレゼンテーション資料集

６年生　１学期の実践

＜単元名＞
本は友達 「森へ」

＜付けたい力＞
◎これまでの本との関わり方を振り返り、グループで発表し合うことで、今後の読書生活の幅を広げることができる。
・自分の考えを明確に表現するため、語句と語句の関係を理解し、文章全体の構成の効果を考えることができる。

本時の取り組み

＜第３時＞
本時の目標
話の大まかな内容をまとめたり、優れた表現や印象に残った部分に着目したりすることを通して、感想や考えを明確にしながら「森へ」を読むことができる。

本時の取り組み

☆１時間で物語を読み取り、紹介するためにはどんな力が必要か。

〇作品の特徴を「大まかにとらえる」力。
〇特徴的な表現を見つけ、自分の感想や考えと関連づけて紹介する力。

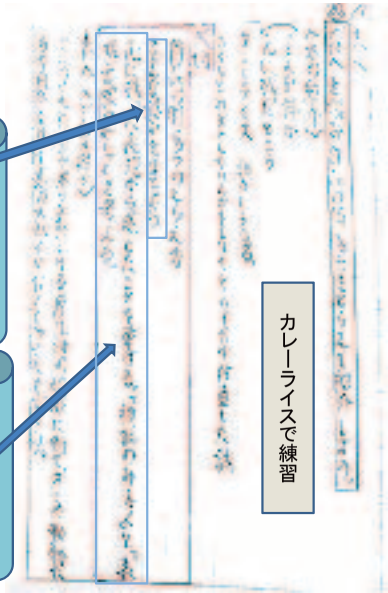
本時の取り組み

＜教えること＞
作品の特徴のとらえ方
→学年の始めに学習した作品「カレーライス」で、練習する。
＜考えさせること＞
「森へ」の大まかな内容と、特徴的な表現を見つけ、まとめる。
→「魅力の視点（こつ）」を使って、あらすじと紹介文を書く。

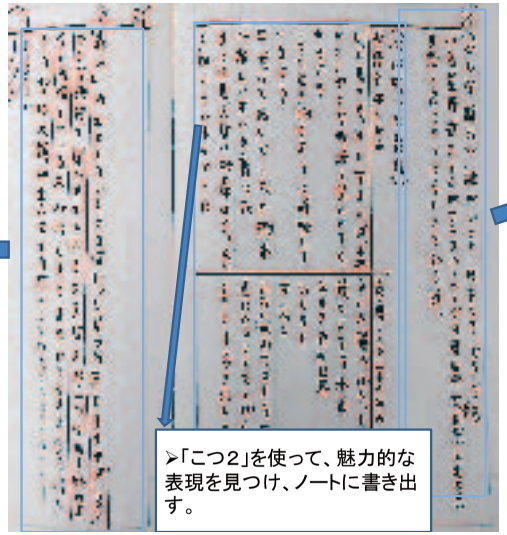
本時の子どものノート

魅力の視点（こつ1）
要約の仕方
「だれが」「どこで」「何をして」「どうなる」
を意識して書くようにする。

魅力の視点（こつ2）
①比喩表現（たとえ）
②擬声語（音）
③五感を使った表現
④擬人化（人にたとえる）
⑤知らないことの出会い
⑥人物の心情・変化



本時の子どものノート



➢「森へ」をコツを使って大まかにあらすじを書く。

➢「こつ2」を使って、魅力的な表現を見つけ、ノートに書き出す。

➢コツを使って見つけた表現を文章にまとめる。

成果と課題

〇始めによく理解している話で練習したため、多くの子があらすじを短くまとめることができた。

〇魅力の視点（表現を探すこつ）を明示したことにより、それを生かして、特徴的な表現に着目したり、引用したりすることができた。

△時間がかかり、交流して深める時間がとれなかった。（書いて終わりになってしまった。）

△読み取りの力の低い子は、紹介文を書くことに苦労していた。

△筆者の伝えたいことやテーマに迫ることができなかった。

2学期に向けて

〇さらに長い文章や物語を大まかにとらえる力を付けるようにしたい。

〇魅力的な表現を「こつ」を使って見つけることができるようにしたい。

〇「筆者の願い」まで読み取り、筆者が読者へ伝えたいことやテーマに迫る深い読み取りをできるようにしたい。

２学期の実践

＜単元名＞
作品の世界を深く読み味わおう
「やまなし」　「イーハトーヴの夢」

＜付けたい力＞
◎二つの場面を比べたり、資料を読んだりすることで、作品の特徴や主題、作者の思いを捉えることができる。

評価規準

物語の叙述や資料から、作者の思いや作品の主題を読み取ることができている。
読むこと（１）エ

複数の本や文章を比べて読み、作者のものの見方や考え方について、自分の考えを深めている。
読むこと（１）オ・カ

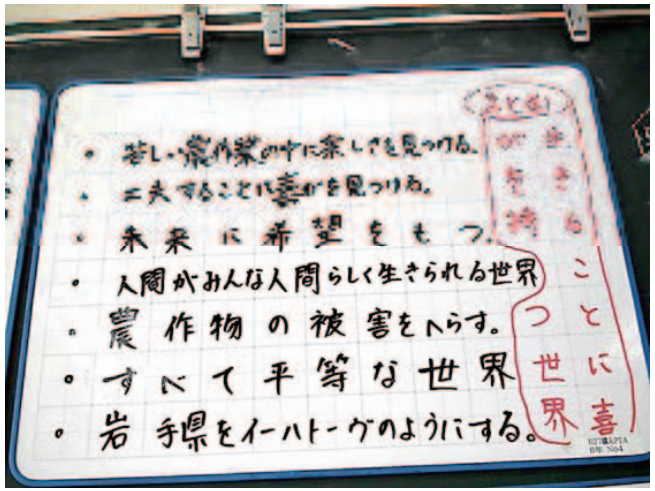
学習の流れ

1	**「やまなし」を読み、初発の感想をもつ。**
2 3	「イーハトーヴの夢」を読み、賢治の生き方や考え方について知る。
4	「五月」の谷川の情景を読み取る。
5	「十二月」の谷川の情景を読み取る。
6	「五月」と「十二月」の幻灯を比べる。
7	題名を「やまなし」にした意味について考える。
8 9	宮沢賢治の他の作品を読み、賢治の生き方や考え方を参考に作品の主題を読み取る。

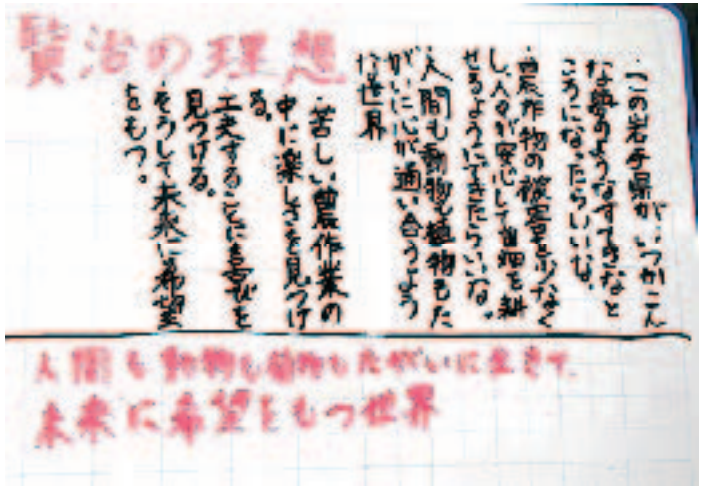
実践の経過

〇単元計画の工夫
「やまなし」の学習をする前に、「イーハトーヴの夢」を学習し、作者である宮沢賢治の生き方や考え方について知る。
↓
「やまなし」の学習前に宮沢賢治の生き方や考え方を知ることで、「やまなし」の世界観を深く考えることができる。

実践の経過



実践の経過



本時の取り組み

①本時の目標

「５月」と「１２月」の谷川の情景や、「イーハトーヴ夢」の中の世界観から、賢治の生き方や考え方を読み取ることを通して、「やまなし」という題名にした意味を考えることができる。

（読むこと）

本時の取り組み

②＜教えること＞

「５月」と「１２月」の世界観（モチーフ）

→前時までに学習した対比を表やイラストにまとめ、振り返ることができるようにした。

本時の取り組み

＜考えさせること＞

題名をなぜ「やまなし」としたのか

→グループでの話し合いの利用。

本時の取り組み

本時の取り組み

〇大切にしたいこと

☆時代背景や人物像を通して主題に迫るという読解方法も一つの手法であることを確認する。

☆前時までに学習した「５月」と「１２月」のモチーフをきちんと押さえる。

５月は日光で明るいけれどもこわい感じ

１２月は月光で暗いけど温かい感じ

実践の経過

〇並行読書

「やまなし」だけでなく、複数の作品を読むことで、賢治の生き方や時代背景と照らし合わせながら、宮沢賢治作品の主題を自分なりに読み解くことができるようになる。

成果と課題

○「イーハトーヴの夢」で宮沢賢治の生き方や考え方を学習したことで、「やまなし」や他作品の読み取りが深まった。

↓

作品の主題や筆者の願いなど、テーマに迫る読み取りにつながった。

成果と課題

▲一つの場面に充てる時間数が短いため、表面的な読み取りで終わってしまった子もいる。

▲「イーハトーヴの夢」が長く、難しい内容のため、方法を工夫しなければ理解が難しい。今回はクイズ形式を利用したが…。1時間の予定が2時間かかった。

国語科における「教えて考えさせる授業」に挑戦

5年生　：　1学期

読む力をつける

単元名　本は友達

「広がる、つながる、わたしたちの読書

千年の釘にいどむ」

目標

白鷹さんが古代の釘を調べるためにしたことや、自分の釘を完成させるためにしたことを説明することを通して、白鷹さんの願いや白鷹さんの素晴らしさを伝えることができる。（読むこと）

45分で「千年の釘にいどむ」を読み取ることに挑戦

- 本単元は、全5時間である。
- 最初の2時間が、学習計画を立てることと本を薦める方法を知ること。3時間目が、教材の読み取り。最後の2時間で、おすすめの本を紹介し合う（ポスター・帯・ポップの作成）学習になっている。
- そのため、「千年の釘にいどむ」を45分で読み取ることに挑戦した。

45分で「千年の釘にいどむ」を読み取るこつ

〈大きなこつ〉

- 白鷹さんがしたことを中心に読み取ることができれば、この「千年の釘にいどむ」を読み取れるのではないかと考えた。

〈小さなこつ〉

- 図を使って説明することができれば、白鷹さんがしたことを読み取ることができたのではないかと考えた。

〈教えること〉

- 白鷹さんがしたことは4つあること
- 4つのうち3つは、古代の釘を調べるためにしたこと
- 残りの1つは、自分の釘を作るためにしたこと

〈考えさせること〉

【理解確認】

白鷹さんが古代の釘を調べるためにしたことを図を使って説明する。

【理解深化】

調べたことを使って自分の釘を完成させた白鷹さんは、どこがすごいのか説明する。

友達の考えを
取り入れる

自信をもって、
自分の意見を発表

自分の意見を
発表し合う

図を使って
みんなに説明

成果と課題

〈成果〉

- 「千年の釘にいどむ」の読み取りのテストで学年平均が、85点であった。
- 読み取ることに時間が掛かる児童も、グループで話し合って、図を使って説明する方法を考えたり、代表の児童が前に出て聞くことで読み取ることができたと考えられる。
- 比較的速く読み取ることができた児童は、自分の考えを聞き手を意識して、分かりやすく説明しようとすることで自信をもつことができた。
- 白鷹さんがしたことを読み取るのに、時間が掛かると思われたので、そこをはじめに教えることで時間短縮ができた。

〈課題〉

- テストの平均点は良かったが、授業の中でのグループでの話合いをするとき、読み取る力の格差が大きく、読み取っていると思われる児童が次のグループで発表 する児童へ必死になって説明していた。
- 友達の意見を聞いて、それを自分の言葉で説明していたが、これでわかったと押さえて良いのか。
- 45分で読み取るには、まとめの時間が足りなかった。

国語科における「教えて考えさせる授業」に挑戦

5年生 ： 2学期

読む力をつける

単元名　本は友達

「伝記を読んで、自分の生き方について考えよう

～百年後のふるさとを守る～」

目標

浜口義兵衛が大津波から村人を避難させるためにしたことや、村を守れる大堤防を完成させるためにしたことを説明することを通して、浜口義兵衛の願いや素晴らしさを伝えることができる。（読むこと）

4時間で「百年後のふるさとを守る」を読み取ることに挑戦

- 本単元は、全7時間である。
- 最初の1時間が、これまでの自分の生き方や考え方をふり返り、学習計画を立てる。2～5時間目が、教材の読み取り。最後の2時間で、自分の選んだ伝記を読み、生き方について考えたことをまとめて発表し合い、感想を述べ合う。
- そのため、「百年後のふるさとを守る」を4時間で読み取ることに挑戦した。

4時間で「百年後のふるさとを守る」を読み取るこつ

〈大きなこつ〉

- 浜口義兵衛がしたことを中心に読み取ることができれば、この「百年後のふるさとを守る」を読み取れるのではないかと考えた。

〈小さなこつ〉

- 図を使って説明することができれば、浜口義兵衛がしたことを読み取ることができたのではないかと考えた。

〈教えること〉

- 浜口義兵衛がしたことは4つあること。
- 1つ目は、大津波から村人を避難させるためにしたこと。2つ目は、村を守るためにしたこと。残りの2つは、大堤防を完成させるためにしたこと。

〈考えさせること〉

【理解確認】

浜口義兵衛が大津波から村人や村を守るためにしたことを図を使って説明する。

【理解深化】

浜口義兵衛は、どこがすごいのか説明する。

図を使って、
みんなに説明する。

友達の発表を聞くことで
自信をもって、自分の意
見を発表できるように
なった。

話合いを通して、
友達の考えを
取り入れる。

児童のふりかえり

成果と課題

〈成果〉

- 「百年後のふるさとを守る」の読み取りのテストで学年平均が、83点であった。
- 読み取ることに時間が掛かる児童も、グループで話し合って、図を使って説明する方法を考えたり、代表の児童の発表を聞いたりすることで読み取ることができたと考えられる。
- 1学期の「千年の釘にいどむ」でも、今回と同じこつを使ったので、グループでの話合いもスムーズに進められるようになった。
- 比較的速く読み取ることができた児童は、自分の考えを友達に分かりやすく説明しようとすることで理解が深まり、自信をもつことができた。
- 浜口義兵衛がしたことを読み取るのに、時間が掛かると思われたので、予習で浜口義兵衛がしたことが書いてある部分に線を引かせた。これによって、本文の読み取りを深めることや教える場面での時間短縮につながった。

〈課題〉

- テストの平均点は良かったが、グループで話合いをするとき、読み取る力の格差が大きいため、読み取っていると思われる児童が次のグループで発表する児童へ必死になって説明していた。また、話合いの深まり は難しい。
- 友達の意見を聞いて、それを自分の言葉で説明していたが、これでわかったと押さえて良いのか。
- 1時間の授業の中で、まとめの時間が足りなかった。
- 本文には、難しい言葉が多く出てくるため、文章の理解が難しい児童も見られた。

１学期の実践
４年生

＜挑戦した領域：「読むこと」＞

＜挑戦した単元＞
「場面の様子に着目して読み、しょうかいしよう」

＜挑戦した教材名＞
「一つの花」（今西祐行）

「付けたい力」

〇物語を読む「こつ」を知る。

〇物語を紹介するときの要素を理解し、自分と友達の感じ方の違いや紹介するよさに気付く。

「物語」を読むこつ　おさえ

〇題名
〇繰り返し（キーワード）
〇中心となる登場人物の会話
〇重要な場面
・出来事が起こる。解決する。
・登場人物の気持ちが変わる。

単元構想　並行読書：戦争や平和に関する本

単元を貫いためあて：「心に残ったことをもとに作品を紹介しよう。」

①作品を紹介する方法やよさについて知り、「一つの花」の感想を書こう。
②物語の設定を確かめ、第一場面の心に残った言葉や文を書こう。
③登場人物の関係を確かめて、第二場面の心に残った言葉や文を書こう。
④第三場面の心に残った言葉や文を書き「一つの花」という題名について考えよう。

単元構想　並行読書：戦争や平和に関する本

単元を貫いためあて：「心に残ったことをもとに作品を紹介しよう。」

⑤⑥「一つの花」をしょうかいして、「もう一度読んでみたいな。」と、友達に思ってもらえるようにしよう。

⑦友達に「読んでみたい。」と思ってもらえるように、物語の紹介文を書こう。（並行読書の中から）

⑧友達が書いたしょうかい文を読み合い、読んでみたくなった物語や交流のよさについてまとめよう。

「物語を読むこつ」をより明確にするための授業展開

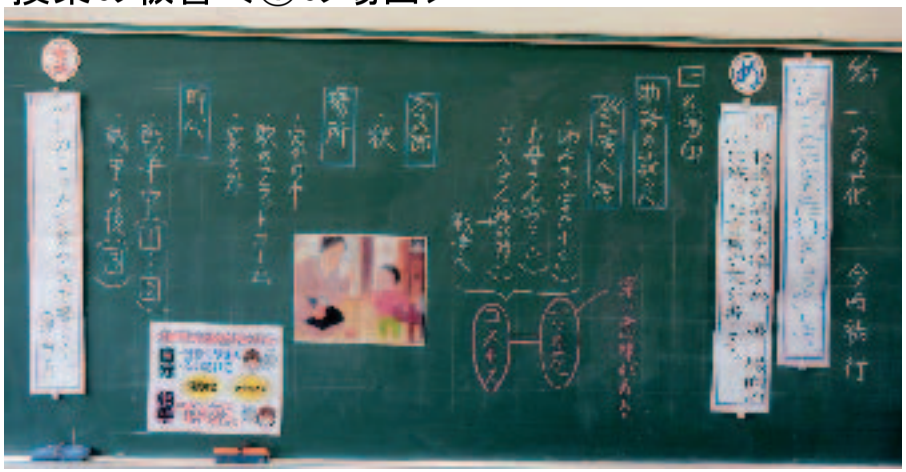
＜1の場面では・・・＞

〇題名「一つの花」から内容について想像する。

★一番心に残った文や言葉を、理由付きでノートに書く。

（ここでは、場面を指定しない。・・・友達に紹介するときに、初めの感想との相違を子ども自身に気付いてほしい思いから。）

授業の板書＜①の場面＞



子どものノートから

「物語を読むこつ」をより明確にするための授業展開

＜2の場面では・・・＞

〇登場人物の関係を中心に読み取る。

・ゆみ子の覚えた「一つだけ」の言葉を父母はどのような気持ちで聞いていたか。

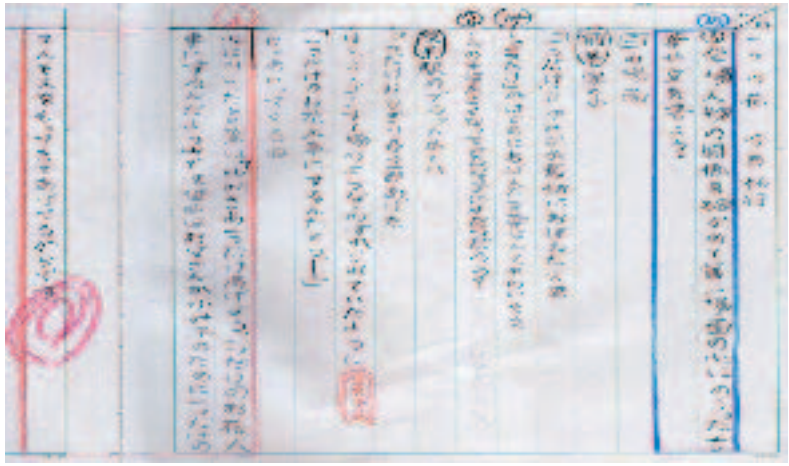
・一輪のコスモスの花は、父のどのような思いがこめられていたか。

・ゆみ子と父の「一つだけ」は、同じか。

★一番心に残った文や言葉を、理由付きでノートに書く。

授業の板書＜②の場面＞

子どものノートから



「物語を読むこつ」をより明確にするための授業展開

＜3の場面では・・・＞

〇戦争中と戦争後の違いをまとめる。

〇「一つだけ」という言葉が③の場面だけ出てこない理由を考える。

★なぜ作者は、この物語に「一つの花」という題名を付けたのか考える。

授業の板書＜③の場面＞

教えること

第4時のおさえ

〇人物の気持ちや様子は、「状況」「出来事」「人物の行動・会話」から読み取ることができる。

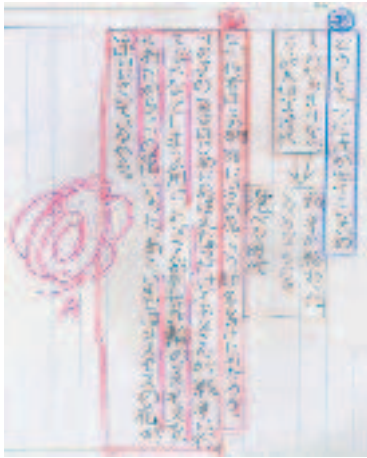
〇作者や特別な意味を込めた言葉は、「題名」「人物の会話」「重要な場面」などで繰り返し用いられている。

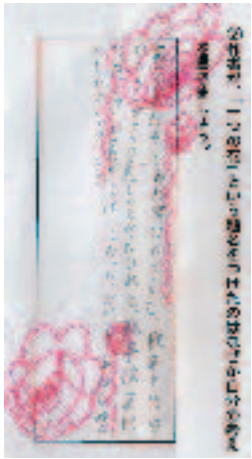
考えさせること

〇なぜ作者は、この物語に「一つの花」という題名を付けたか。

子どものノートから

子どものノートから





授業の板書＜第⑤時＞

教えること

第6時のおさえ

○「一つの花」を友達に紹介するのは、物語の題名や登場人物、時代背景、季節、出来事、心に残った文や言葉などから選んで紹介する。

○交流学習では、自分と友達の考えを比べることを通して、似ている点や違う点に気付いたり友達の良さを認め自分の考えをさらに明確にする。

考えさせること

○紹介文の中心をどの要素を選べば自分の考えを分かりやすく伝えることができるか。

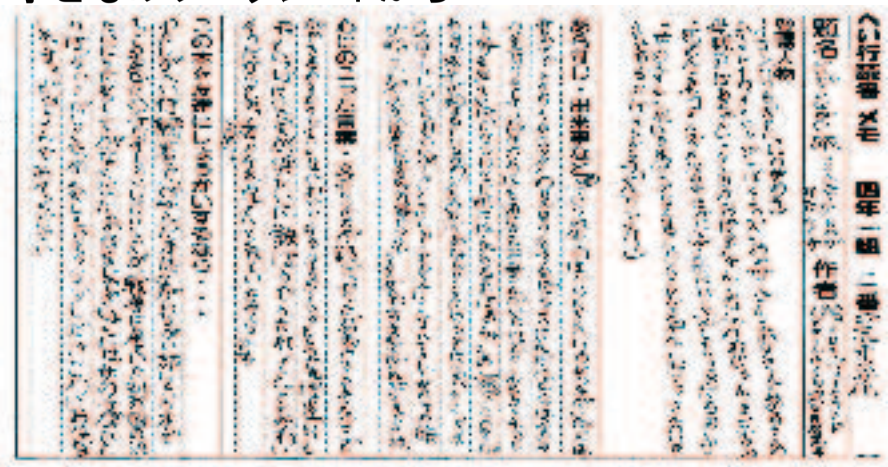
「一つの花」をしょうかいしよう

授業の板書＜第⑥時＞

「一つの花」をしょうかいしよう

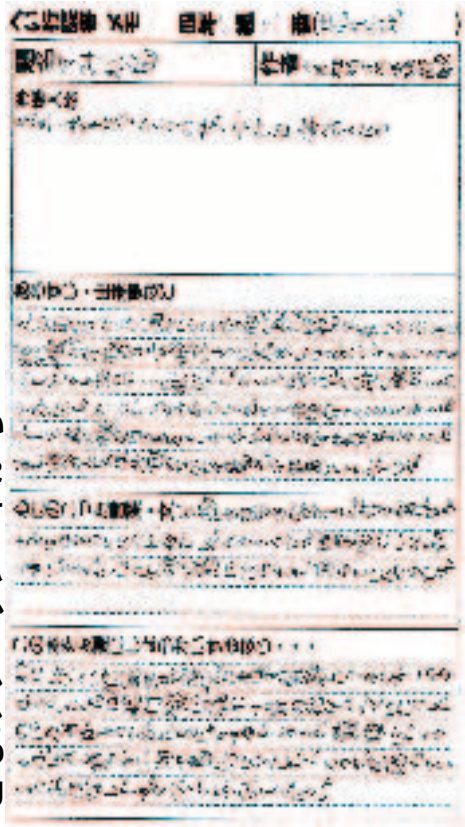
授業の板書＜第⑦⑧時＞：紹介する・交流する

子どものワークシートから



子どものワークシートから

交流の様子



子どものワークシートから

交流の様子

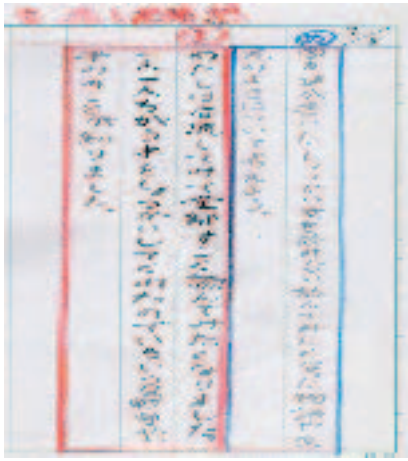
交流の様子

交流の様子

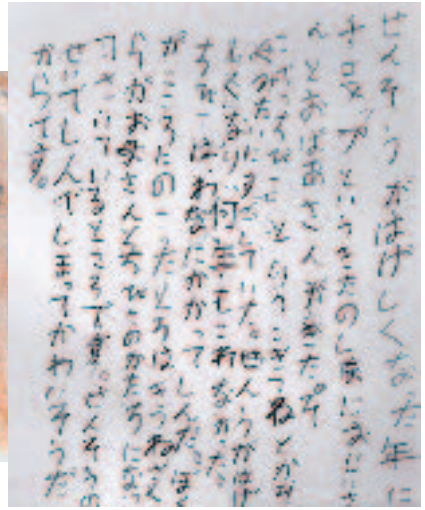
交流の様子

交流の様子

子どものノートから



子どもの紹介カードから



＜成果＞

◎「学校の通信簿」の中から・・・

・作者の思いがわかるようになってきた。
・心に残った文を書くのが好きになってきた。
・国語の学習がわかるようになってきた。
・並行読書でたくさんの本を読むことができてよかった。
・友達の文を読んだり話を聞いたりする交流学習が楽しかった。

＜成果＞

◎授業として・・・

・「物語を読むこつ」をおさえることで、本を紹介するときの着目する内容をおさえて伝えるようにしていた。

・「戦争」や「平和」について、子どもたちなりの気付きがあった。

＜課題＞

・友達に伝えるときに、ワークシートを読むのではなく、簡単なメモだけで、あとは自分で言葉を作って伝えることができるようにしたい。

・「物語を読むこつ」を学習したので、今後の読書活動や自分の考えを伝えあう交流学習に生かしていきたい。

＜2学期の実践につなげるために・・・＞

◎物語の種類がちがう「ごんぎつね」に挑戦するので、共通している「こつ」を活用しながら読み深めていきたい。

◎「ごんぎつね」では、自分と登場人物を重ねたり、交流学習では、自分の考えと比べながら、友達の意見を聞くようにしたい。

2学期の実践

4年生

＜挑戦した領域：「読むこと」＞

＜挑戦した単元＞
「読んで考えたことを話し合おう」

＜挑戦した教材名＞
「ごんぎつね」（新見南吉）

「付けたい力」

〇物語を読む「こつ」を使って人物の気持ちを読み取る。

〇人物と自分の気持ちを重ね合わせたり、自分の経験を結び付けたりして想像豊かに読み取る。

「物語を読むこつ」

〇「行動」や「会話」（白いぼうし）
〇「情景描写」⇒「風景」「物」「色」「音」

〇「人物と自分の気持ちを重ね合わせたり、自分の経験と結び付けたりする」

単元構想　並行読書：新見南吉の本

単元を貫いためあて：「心に残ったことをもとに作品を紹介しよう。」

①4年生で学習した物語文の学習（こつ）を振り返り、学習の見通しをもち「ごんぎつね」の感想を書こう。

②物語の設定を確かめよう。

③第一場面を読み、ごんの気持ちを読み取ろう。

④第一場面を読み、兵十の気持ちを読み取ろう。（本時）

単元構想　並行読書：新見南吉の本

単元を貫いためあて：「心に残ったことをもとに作品を紹介しよう。」

⑤第二場面のごんの気持ちの変化を読み取ろう。

⑥第三場面のごんの気持ちの変化を読み取ろう。

⑦第四・五の場面のごんの気持ちを読み取る。

⑧第六場面を読み、ごんと兵十の気持ちを読み取る。

単元構想

・並行読書：新見南吉の本

単元を貫いためあて：「心に残ったことをもとに作品を紹介しよう。」

⑨⑩「ごんぎつね」を学習して感じたこと・考えたことをグループごとにテーマを決めて話し合おう。

⑪～⑬　新見南吉の本を読み、ポップなどを作って紹介し合おう。

教えること　第4時のおさえ

○人物の気持ちや性格は、「行動」「言葉」「情景描写」に着目し、想像しながら読み取ること。

○作者や特別な意味を込めた言葉は、「題名」「人物の会話」「重要な場面」などで繰り返し用いられている。

考えさせること

○1の場面では、どのような「行動」「言葉」「情景描写」が書かれているか。そこから兵十のどのような気持ちを読み取ることができるか。

教えること　第11～13時のおさえ

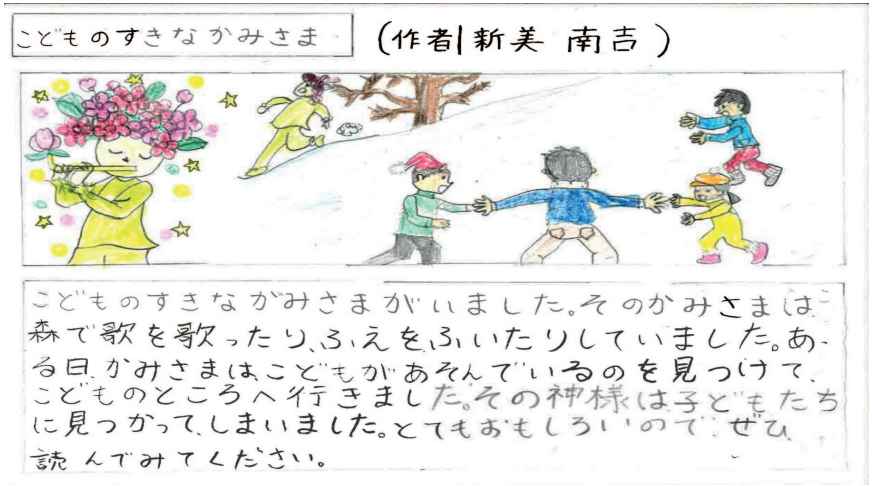
○「新美南吉の作品」を友達に紹介するのは、物語の題名や登場人物、季節、出来事、心に残った文や言葉などから選んで紹介する。

○交流学習では、自分の言葉で説明することに加え、自分と友達の考えを比べることを通して、似ている点や違う点に気付いたり友達の良さを認め自分の考えをさらに明確にする。

考えさせること

○紹介文の中心をどの要素を選べば自分の考えを分かりやすく伝えることができるか。

子どもの紹介カードから



＜成果＞

◎子どもたちのまとめなどから・・・

- 色に注目すると気持ちが読み取れるのが分かった。
- 人物の気持ちを読み取るのが得意になった。
- 学習をする前と後で自分の意見が変わっていておもしろかった。
- 友達と意見を交流し合って自分と違う意見を聞けるのが楽しかった。

＜成果＞◎授業から･･･

・「物語を読むこつ」をおさえることで、人物の気持ちを根拠をもとに読み取ることができた。

・友達の意見と自分の意見を比べて交流することに学ぶ喜びを感じる子が出てきた。

・紹介文を読むのではなく、キーワードをもとにして紹介しようとする姿勢が見られた。

・家庭学習での学びが授業に繋がった。

＜課題＞

・情景描写から読み取るには、前後の文も読むことが必要であることをおさえる。

・ペア活動では自信を持って話せるが、全体の前で話すことが難しい。

・「自分の行動や考え方に重ねて読む」ことが難しい。言葉を知らないことや、低学年からの系統立てた経験をしていないのではないか。

実践Ⅰ

＜単元名＞
「読んで感じたことを
発表しよう」

＜教材名＞
「もうすぐ雨に」

「付けたい力」

ファンタジーの世界を楽しみ、友達の考えのよさを認めながら、文章を読んで考えたことを進んで伝えようとする。

- 場面の移り変わりに注意しながら、登場人物の行動や気持ちの変化について、叙述を基に想像して読む。
  →「読むこつ」
- 「もうすぐ雨に」の学習を進めながらリーフレット作りを行い、その経験を基に他作品を紹介するリーフレットを作る。

学習活動①

ファンタジー作品を友達に紹介するために「もうすぐ雨に」の読みを深めたいという目的意識をもつ。

教えて考えさせる

教えること

◆ファンタジー作品とは何か。

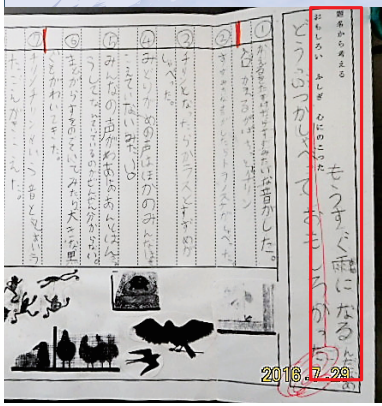
◆キーワードになりそうな言葉の意味。

考えさせること

◇初発の感想をもつこと。

学習活動②

題名にどのような意味があるのか考える。



教えて考えさせる

教えること

◆「題名」には作者が特別な意味を込めている場合がある。

考えさせること

◇題名の意味について考えること。

学習活動③

文の組み立てを確かめる。

教えて考えさせる

教えること

◆起承転結とは何か

◆あらすじの書き方

考えさせること

◇物語のあらすじを捉える。

学習活動④

それぞれの場面における「ぼく」の気持ちを考える。

教えて考えさせる

教えること

◆行動、発言内容から気持ちを捉えることができる例

考えさせること

◇主人公の気持ちを考える。

学習活動⑤(本時)

不思議な出来事の前後で、「ぼく」はどう変化したか考える。

教えて考えさせる

教えること

◆ファンタジー作品には入口と出口がある。

考えさせること

◇主人公がどう変化したか考える。

学習活動⑥

出来事や登場人物の変化について、感想をまとめ、交流する。

教えて考えさせる

教えること

◆感想の書き方、リーフレットのまとめ方

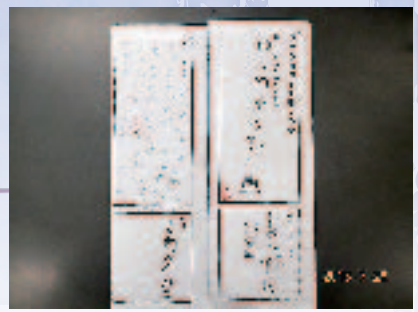
◆交流の仕方

考えさせること

◇主人公の変化について考えを深めたり、感想をもったりする。

学習活動⑦

他のファンタジー作品を読んで、リーフレットを作る。



教えて考えさせる

教えること

◆ファンタジー作品の紹介

◆リーフレットのまとめ方

考えさせること

◇主人公の変化について考えを深めたり、感想をもったりする。

学習活動⑧

リーフレットを見せながら他のファンタジー作品を紹介し合う。

教えて考えさせる

教えること

◆作品の紹介の仕方

考えさせること

◇主人公の変化について考えを深めたり、感想をもったりする。

本時の活動

（1）目標

ファンタジーの世界を経験する前後で、主人公がどう変化したか意見を交流することを通して、いろいろな読み方があることを知ることができる。

(2) 本時のおさえ

【教えること】

◆ファンタジー作品には入口と出口があり、その前後で変化がある。

◆本作品の入口と出口がどこにあるか確かめる

【考えさせること】

◇主人公がどう変化したか考える。

【読むこつ】

◎音・におい・色に注目する。

◎前後を比較する。

本時の展開

【教師からの説明】

◆ファンタジー作品には入口と出口があり、その前後で変化がある。

◆本作品の入口がどこにあるか確かめる

本時の展開

【理解確認】

◆不思議な出来事の出口がどこか考える。

本時の展開

【理解深化】

◆不思議な出来事の前後で「ぼく」は変わったのかどうか考え、その理由を話し合う。

本時の展開

【振り返り】

◆学習を振り返り、理解度を確認する。

成果
○「読むことのこつ」を使うことを意識しながら単元を展開したので、どのような読み方をすればよいのか理解できた子が多かった。他のファンタジーを読む活動では、「こつ」を使って読書することができた。
○教えることを明確にしたので、考えさせる時間や話し合う時間を確保でき、話し合いに深まりが見られた。

課題
●「こつ」につながる項目をリーフレットに盛り込んだが、リーフレットにすることが負担になった子がいた。表現方法、項目など検討していく必要がある。

実践報告「教えて考えさせる授業」
２年生

１学期の取組

＜読むこと・書くこと＞

お話を　読んで、かんそうを　書こう

「スイミー」

単元計画

付けたい力

「スイミー」

◎　文章の中の大事な言葉や文を書き抜き、それをもとに感想を書くことができる。読む（１）ウ、エ、オ

○　人物の行動や場面の様子などについて、想像を広げながら読み、感想を書くことができる。書く（１）ウ

○様子を表す言葉を使って文を書くことができる。伝国（１）イ（ウ）

スイミーの学習における「教えて考えさせる授業」

＜教える＞
・行動・会話に注目して読むことで場面の様子が分かる。
・理由を表す表現を知る。「どうしてかというと、…からです。」

＜考えさせる＞
自分の感想を分かりやすく書くにはどうしたらいいのか。

＜コツ＞
・文章に立ち返らせる。
　→感想をもった根拠となる場面をはっきりさせる。
・ことばのたからばこを読み、気持ちを表す言葉を確認する。
　→自分の気持ちにぴったり合う言葉を考える。

成果と課題

○物語が年齢に合っており、スイミーの気持ちや場面の様子は比較的理解できていた。

○自分の感想を理由を表す表現を使って、書くことができた。

●どのような場面で今回の書き方が使えるのか理解できているか？

●書く能力が低い子には、感想を書く以前に正しく文章を書く指導が多くなってしまった。

改善点①

どのような場面で今回の書き方が使えるのか理解できているか？

どうしてかというと～からですという表現を教えた後、作文に入ってしまったため、その表現を使える場面まで考える時間を与えられなかった。

短くても良いので理由を表現させる文章を繰り返し書く中で今回の書き方を定着させたい。

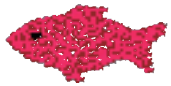
そのために

「どうしてかというと～からです。」

どんな時にこの形を使うことができるのかな？

理解深化では、文章を繰り返し書く活動を通してなぜなら～からです。という表現を使うことで相手に分かりやすく理由が表せられることを理解させたい。

改善点②



- 書く能力が低い子には、感想を書く以前に正しく文章を書く指導が多くなってしまった。

日頃の書く指導の充実が必要。

今回の学習では、作文のどの点に重点を置いて指導すべきなのか、事前の押さえが必要。

本時の学習で教えたいこと･どこで評価するのかをしっかりと押さえておく。

2学期の取組

＜読むこと・書くこと＞

音読げきをしよう

「お手紙」

単元計画

付けたい力

「お手紙」

◎場面の様子について、登場人物の行動や会話を中心に想像を広げながら読み、声の出し方などを工夫して音読劇をすることができる。　　読む（１）ア、ウ、オ

○手紙を書く楽しさを知り、物語の登場人物に言ってあげたいことを手紙に書くことができる。
書く（１）ア、イ

○物語を読み、自分の経験と結び付けて、感想を発表しあうことができる。　　伝国（１）イ（カ）

「お手紙」の授業時間における「教えて考えさせる」

＜教える＞
①登場人物の行動や言葉に注目することで人物の感情を読み取ることができる。（第２時～第５時）
②声の出し方（速さ・大きさ）を工夫することで、聞き手に登場人物の感情を伝えることができる。（第７時～第８時）※本時

＜考えさせる＞
どのような読み方をしたら、かえるくんやがまくんの気持ちを聞いた人に伝えることができるのか。

＜こつ＞
・自分に置き換えて気持ちを考える。
・声の速さと大きさを変えて読んでみる。

手立て･活動

①登場人物の行動や言葉に注目することで人物の感情を読み取ることができる。（第２時～第５時）

かえるくんやがまくんの気持ちが分かるところに線を引き、どんな気持ちか書き込む。

かえるくんやがまくんの行動や言葉に注目して読んでみよう。

自分だったらどんな気持ちなのか考えてみよう。

心配だなぁ。
大丈夫かな？
どうしたんだろう。

「どうしたんだい、がまがえるくん。きみ、かなしそうだね。」
「うん、そうなんだ」

かなしい気持ち

②声の出し方（速さ・大きさ）を工夫することで、聞き手に登場人物の感情を伝えることができる。
（第７時～第８時）※本時

＜考えさせる＞
どのような読み方をしたら、かえるくんやがまくんの気持ちを聞いた人に伝えることができるのか。

自分が考えた、かえるくん･がまくんの気持ちが伝わるような読み方を考えよう。

①二人組お互いに聞きあって練習
②グループで聞きあって練習

○上手･「気持ちが伝わる」、もう一歩･「読み方の違いが分からない」

×アドバイス、どう変えればいいのか、なんで気持ちが伝わらないのか。

見えてきた課題

気持ちの伝わる読み方・上手な読み方

・感覚的、なんとなく ・はきはき、スラスラ読めている。

どのように読めば、どんな気持ちを表すことができるのかが具体的に分からない。

・アドバイスができない。
・何に気を付けて練習していいのかが分からない。

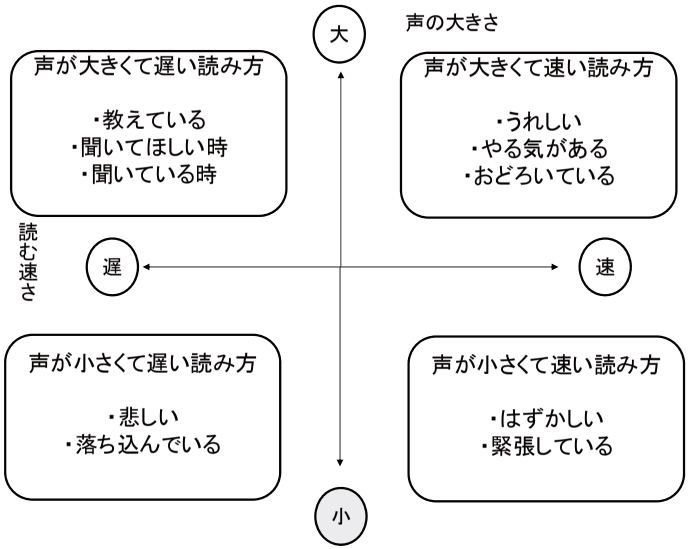
課題に対する手立て

①子どもたちがイメージ・練習しやすい。声の大きさと読む速さをキーワードとする。

・声の大きさ （大きい・小さい）

・読む速さ（速い・遅い）

②この二つの要素の組み合わせでどんな気持ちが感じられるか考える。



〇読み方を要素によって4つの部屋に分けることで、どの部屋の読み方をしたら良いのかが分かるように。

・がまくんは悲しい気持ちだから声は小さく、ゆっくり読もう。

・かたつむりくんの「すぐやるぜ」は張り切っているから大きく速く読もう。

〇聞くポイントを具体的にすることでアドバイスができるように。

・がまくんが驚いているせりふだから、もっと大きく読んだほうがいいよ。

〇全体で確認しなかった気持ちもこの2つの要素で考える姿が見られた。

・「とても、いいお手紙だ。」は感動してるからゆっくり大きめの声がいいんじゃないかな。

成果と課題

〇登場人物の気持ちを考える視点をはっきりすることで、みんながどんな気持ち　なのかを考えることができた。
〇読む時に工夫する要素をはっきりと示し、全体で共通理解したことで、具体的にアドバイスしたり練習したりすることができた。

●声の要素として、大きさと速さに視点を置いたため、他の要素を意識しなくなってしまった。（強弱や高低、明暗など）
●声・読み方に比重を置いたので動作や表情などの工夫が音読劇の時にあまりみられなかった。→低学年であることを考えると動作などを多く取り入れて役になり切って読んでいくのも良かったのでは…。
●音読としての評価の難しさ。何がどう変わったのか。

年間を通しての振り返り、成果と課題

〇教えて考えさせる授業を構想することで、子どもたちに何をその時間や単元を通して教えるのか、身に付けさせたいのかを確認して学習に取り組むことができた。

〇学習することやコツなどを示すことで、考えることややることがはっきりし、以前より国語が好きになったと答える子どもが多く見られた。

●教えて考えさせる授業に対しての理解がしっかりとできていない段階では、教えること、こつ、深化など活動や内容に対しての迷いがあった。

●その単元を通して、教えて考えさせるとした内容が学年や単元に本当に適していたのか、また、その内容が子ども達に定着しているのかは検討・考察が必要だと感じる。

１年生の取り組み

実践:1学期

〈読むこと〉
くちばしクイズをつくろう

『くちばし』

付けたい力

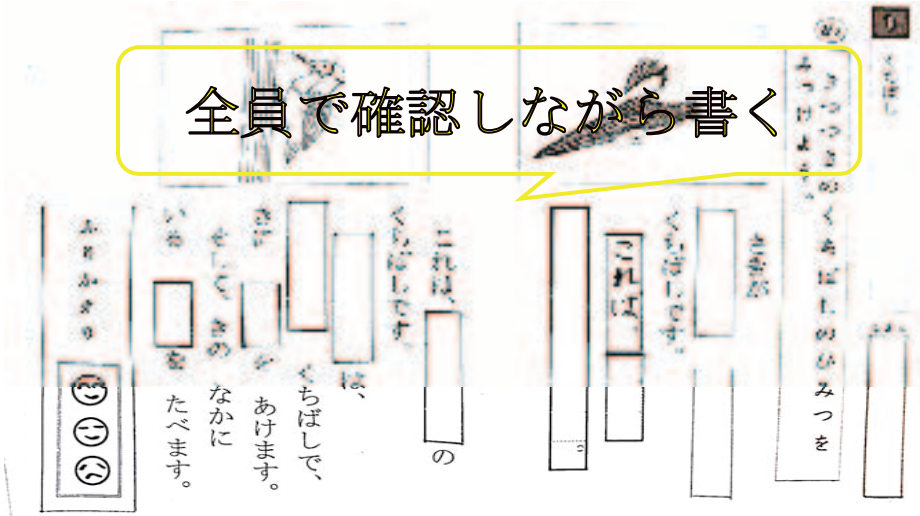
・問いと答えという説明の順序や内容を正しく捉えて読むことができる。
・呼応関係に注意して、問いと答えの文を書くことができる。

学習の進め方

①文章を読み、３種類のくちばしが出てくることをおさえる。
②「きつつき」の文でこつを教える。

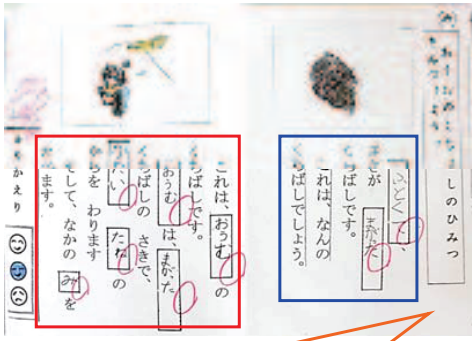
こつ ➡ ここで文型を教える

1 問いと答えでできている
2 問いの文末は「～でしょう。」
3 答えの文末は「～です。」



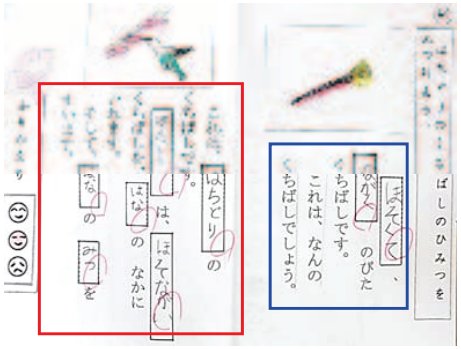
学習の進め方

③こつを使って「おうむ」「はちどり」を読み、ワークシートに書く。



問いの文

答えの文

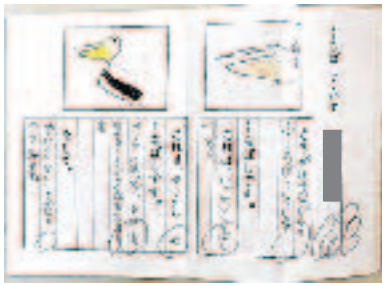


大切な言葉を
本文から書き抜く

学習の進め方

・写真や動画から分かることを出し合う
・キーワードの板書
・キーワードを使って文を書く
・友達に紹介する

④写真や動画を見てくちばしクイズをつくる。



成果

- 自分で問いと答えが書けるようになった。
- クイズ形式の文が書けるようになった。
- １つの言葉として捉えられるようになった。

課題

- 基本的な「聞き取る力」「自分で読み取る力」を付ける。
- 意見を交流する機会をつくる。
- 「教える」に時間を掛けすぎない。

１年生の取り組み

実践:2学期

◆単元名

くらべてよもう

「じどう車くらべ」～のりものブックをつくろう～

◆つけたい力（重点）

・事柄の順序を考えながら内容の大体を読み、本や文章の中から、必要な言葉を書き抜くことができる。（読むこと）

・事柄の順序に沿って、簡単な構成を考え、文と文の続き方に注意しながら、つながりある文章を書くことができる。（書くこと）

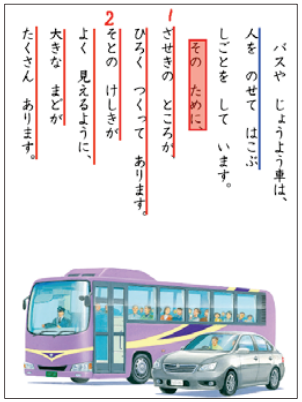
【教えること】

・「しごと」＋「つくり」＋「つくり」の文型
・「しごと」と「つくり」の関係
・文章を表に合わせて書き抜くこと
・「そのために」の役割
・表を見て文章を書く方法

【考えること】

・「しごと」と「つくり」を表に合わせて書き抜くこと
・表を見て、「しごと」と「つくり」を説明すること
・説明する文章を書くこと

実践①　大事な言葉を見つけ、区別するため色分けをして線を引く（視覚化）



しごと…青　つくり…赤

大事なところだけ、必要なところだけを選んで線を引けるようになった。

しごと・つくり・つくりの順で書かれていることに気付き、文の構成をとらえられるようになった。

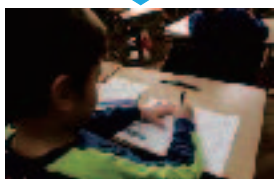
実践②　ワークシートの工夫

表に合うように、文を言い切りの形に変えたり、言葉を抜き出したりする力が付いた。

つなぎ言葉の「そのために」を意識することができた。

「そのために」という言葉が「しごと」と「つくり」をつないでいることを実感し、理解することができた。

実践③　繰り返し話す→書く



友達との交流によって、内容の理解が深まった。

簡潔にまとめられた表を見ながら、言葉を付け足して説明ができるようになった。
「そのために」「～ます。」など

書くのが苦手な子でも話したことをそのまま書けばよいことが分かり、つながりのある文章が書けるようになった。

その他の取り組み～日々の指導より～

◆ＭＩＭを活用した指導（拗音、促音など）

◆語彙を増やすための言葉遊び

◆教科書に出てきた難しい単語をいろいろな言い方で理解させる
例）「じょうぶな」→強い、壊れない、しっかりした など

２学期の成果

・仕事とつくりを見つけて色分けすることで内容や構成が分かりやすくなった。
・「そのために」という言葉の役割を理解し、「仕事ーそのためにーつくり」という文型で説明文を書くことができるようになった。
・友達との交流の機会を作ることで、抵抗なく自分の考えを伝えたり、友達の良さに気付いたりすることができた。

２学期の課題

・自分で文章を読んで言葉の意味を理解したり、大事な言葉を見付けたりする力を付けたい。
・「教える」段階を短くして、「深化、まとめ」の時間を確保する。

研究メンバー

■袋井市立高南小学校

校長　西尾重男

教頭　兼子近司

比奈地典子　芥川梓　安間早紀奈　大石理恵子　松井徳男

山田弘子　齋藤禎也　山口亜矢

磯部菜穂枝　太田充　村松靖則　神田泰子

鈴木博之　榛葉佑佳　小林明子　近藤郁子　坂口敦規

寺田育代　新木友

太田幸恵　松尾建央　滝口泰弘

■東京大学大学院教育学研究科

助教　植阪友理

国語科における「教えて考えさせる授業」
―読み方のコツを重視した平成 28 年度袋井市立高南小学校の実践―
植阪友理・高南小職員（編著）

発行者： 東京大学大学院教育学研究科　植阪友理
（編集担当：植阪友理、末次伶、太田充）
連絡先：〒113-0033
東京都文京区本郷 7－3－1
東京大学大学院教育学研究科教育学部棟
E-mail：y_uesaka@p.u-tokyo.ac.jp
Tel & Fax:　03-5841-4915
発行日：平成 29 年 3 月 31 日
印刷/製本：よしみ工産